

ゲルマン語強変化動詞および過去現在動詞 IV, V 類に見られる 形態的差異について

——Schumacher (2005) 論考の批判的考察と形態的混交説からの提案——

田 中 俊 也

九州大学

【要旨】 ゲルマン語強変化動詞 (strong verbs) の過去形と過去現在動詞 (preterite-present verbs) の現在形は、ともに印欧祖語の完了形を継承しているという見解が従来の印欧語比較言語学研究において最も受け入れられてきた。しかしながら、IV, V 類の動詞については、強変化動詞過去複数形では語根に長母音をもつ形態 (**bēn-* あるいは **bēʳ-* ‘carried’, **lēs/z-* あるいは **lēs/z-* ‘collected’ など) が生じ、過去現在動詞現在複数形では語根にゼロ階梯母音を反映する形態が生じる (e.g. **mun-* ‘think’, **nug-* ‘are sufficient’)。完了形のみからの発達とする従来の説では、この差異について十分な歴史的説明が与えられていない。Schumacher (2005) はこの見解に基づく新たな研究であると言えるが、彼の「*bigētun-* 規則」に基づく論考においても、当該の形態的差異については十分な説明がなされていない。本稿では、Schumacher (2005) の論考も含め、「完了形のみからの発達」とする説に対する批判的考察をまず行い、その後にはそれとは異なる立場から、当該の形態的差異が歴史的にどのようにして生み出されたのかについての説明を試みる。それは「形態的混交説 (morphological conflation theory)」と呼ぶべき立場であるが、これによれば、ゲルマン語強変化動詞の過去形は印欧祖語の完了形 (perfect) と未完了形 (imperfect) との形態的混交に由来するとし、過去現在動詞の現在形は印欧祖語の完了形と語幹形成母音によらざる語根現在中動形 (athematic root present middle) との形態的混交に由来すると考える。強変化動詞過去形と過去現在動詞現在形は、このように発達過程が異なるために、IV, V 類動詞に見られる形態的差異が生じたと考えられることを論じる*。

キーワード: ゲルマン語, 強変化動詞, 過去現在動詞, IV類とV類の複数形態, 形態的混交

1. はじめに

ゲルマン語の強変化動詞の過去形および過去現在動詞の現在形は、印欧祖語の完了形のみ由来するという説が従来最も一般的だったと言える (Prokosch 1939:

* 本稿は、2012年11月24日(土)に日本言語学会第145回大会(九州大学箱崎文系キャンパス)で口頭発表した原稿に、大幅な加筆ならびに修正を加えたものである。発表の前後に貴重なご意見、ご教示をいただいた諸先生方に感謝します。特に、九大の同僚である Stephen Laker 博士には、様々なご助力をいただきました。原稿の細部に渡っての貴重なコメントをいただいた2名の匿名の査読者の先生方にも、厚くお礼を申し上げます。尚、本研究はJSPS科学研究費(課題番号: 22520436 および 15K02520)の助成を受けたものである。

160; Matzel 1970: 173; Jasanoff 1994: 272などを参照)¹。本稿で批判的考察の対象とする Schumacher (2005) でも、ゲルマン語過去現在動詞の現在形の形態、および強変化動詞の過去形の形態は、印欧祖語の完了形にのみ由来するという説を採用している。この完了形にのみ由来するという説では、過去現在動詞 IV, V 類の現在形、および強変化動詞 IV, V 類の過去形の間に存在する形態的差異が満足に説明できないことを論じ、その代案を提示することが本稿の目的である。

ゲルマン語強変化動詞 IV, V 類過去複数形では語根の母音が延長階梯を示す形態が生じるのに対し、過去現在動詞 IV, V 類の現在複数形では語根の母音がゼロ階梯を反映する形態が生じる。以下の (1) と (2) を比較されたい。

(1) 強変化動詞 (Krahe and Meid 1969: II. 104などを参照)

第 IV 類「運ぶ」 第 V 類「集める」

Go.	<i>baíran bar — bērum</i>	<i>lisan las — lesum</i>
ON	<i>bera bar — bōrom</i>	<i>lesa las — lōsom</i>
OE	<i>beran bær — bēron</i>	<i>lesan læs — læson</i>
OS	<i>beran bar — bārun</i>	<i>lesan las — lāsun</i>
OHG	<i>beran bar — bārum</i>	<i>lesan las — lārum</i>
PGmc.	<i>*ber-/*bar- — *bēr- or *bē¹r-</i>	<i>*les- *las- — *læs/z- or *lē¹s/z-</i>

(2) 過去現在動詞 (Krahe and Meid 1969: II. 138などを参照)

第 IV 類「思っている」 第 V 類「十分である」

Go.	<i>man — munum</i>	<i>ga-nab — undocumented</i>
ON	<i>man — munom</i>	<i>undocumented — undocumented</i>
OE	<i>man — munon</i>	<i>be-neab — be-nugon</i>
OHG	<i>undocumented — undocumented</i>	<i>gi-nab — undocumented</i>
PGmc.	<i>*man- — *mun-</i>	<i>*naχ- — *nug-</i>

強変化動詞 IV, V 類過去複数形の語根が長母音を示す形態の発達について、これまでに試みられた説明として、完了形(複数形)に元々あった畳音とゼロ階梯語根の間に縮約(contraction)が生じた(第 IV 類 $Ce-CR̥' → CēR̥'$; 第 V 類 $Ce-C:T' → CēT'$) というものがあるが、この説には様々な問題が残る。音変化としての説明には反例が挙がり、形態変化としての説明は十分な説得力がない²。

¹ 強変化動詞は完了形と語根アオリスト形(root aorist)との混交であり、過去現在動詞は完了形を純粹に継承したものだとする説もあるが、これはあまり受け入れられていない。本稿でも「完了形にのみ由来する」とする説を考察の対象とする。なお、これらの研究史の批判的検討には田中(2013a)などがある。

² これらの問題点については、田中(2013a: §3)に詳細な指摘がある。音変化としての説明としては、印欧祖語完了複数形 **se-sd-* あるいは **se-zd-* '(have) sat' が縮約によって、ゲルマン祖語 **sēd-* (あるいは **sē¹d-*) 'sat' に発達したとする説 (Streitberg 1896: 81–83 や Cowgill 1960: 489 を参照) があるが、これに対しては、印欧祖語 **ni-zd-ō-* > ゲルマン祖語 **nist-* 'nest' となる例が反証となる (Prokosch 1939: 161–163; Sihler 1995: 213; Mottausch 2000: 45 などを見られたい)。

更に言えば、ゲルマン語強変化動詞 IV, V 類の過去複数形における語根母音が延長階梯を示す形態と、印欧諸語の「長母音完了形」あるいは「長母音過去形」とはどのような関係があるか、従来十分な解決を見ていない (Fortson 2010: p.103 § 5.50. Long-vowel preterites を参照) ³。

ゲルマン語強変化動詞過去形および過去現在動詞現在形は印欧祖語の完了形 (のみ) から発達したとする見解を保ち、かつ印欧諸語の「長母音完了形」乃至は「長母音過去形」の起源を説明しようとする新たな研究成果として Schumacher (2005) が挙げられる。本稿の目的は、Schumacher が提唱する印欧祖語における形態規則「*bigētun-*規則」の存在は疑わしく、かつこの規則に基づいてもやはりゲルマン語の強変化動詞と過去現在動詞 IV, V 類の間にある当該の形態的差異を十分に説明できないことを論じることである。また、Schumacher 説の代案として「形態的混交説 (morphological conflation theory)」の立場からの説明を提案することも目的とする。(尚、この提案では、長母音完了形あるいは長母音過去形は、ナルテン型 (Narten type) の未完了形に由来するという立場を取ることになる。)

2. Stefan Schumacher (2005) の提案

Schumacher (2005) の主要な提案は以下の 3 点にまとめられる。

- 1) 印欧祖語完了形の形態について伝統的見解の保持：畳音 + *o*/zero- 階梯語根 + 完了語尾 (Schumacher 2005: p.592 § 1)
- 2) ゲルマン語強変化動詞の過去形 (実質上、過去現在動詞の現在形もこの範疇に入れて議論を展開している) は印欧祖語の完了形に専ら遡るという、伝統的な見解の保持 (完了形と語根アオリスト形との混交説は採らない) (Schumacher 2005: p.593 § 3.1.1)
- 3) 印欧祖語の形態規則として「*bigētun-*規則 (*bigētun-Regel*)」の提案 (Schumacher 2005: 601f. § 5)
 - ・畳音が付く動詞形態に関して、印欧祖語の語根構造の制約と密接に関わる特別な構造的制約があった。印欧祖語の語根構造の制約 = 印欧祖語の語根では、盈階梯母音 **e* の両側にひとつの同一の阻害音を持つことはできない (つまり、†*kēk-* や †*b^heb^h-* などは排除される)。
 - ・このような不可能な構造 (同一音節の **T₁eT₁-*) は、語中の閉鎖音 (-*T₁-*) を削除すると同時に、音節の長さを保持するために、畳音の母音を **ē* に延長した。
 - ・これからして、2つの阻害音を持つ語根 (語根構造 **T₁eT₂-*) から成る完了形の弱語幹において、畳音音節 (**T₁e-*) に直接続く阻害音 (-*T₁-*) は規則的に

また、形態的発達の観点からの説明として Kuryłowicz (1956: 309-311; 1968: p.290 §367) が挙げられるが、Kuryłowicz 説の問題点を指摘したものに、田中 (2013a: pp.77-84 §3.3) がある。

³ 印欧語の長母音完了 (または過去) 形が、語根静止 1 型 (acrostatic 1 type) 乃至はナルテン型 (Narten type) の未完了形に遡るとする理論として、Jasanoff (1998: 307; 2003: p.31 fn.5, p.193 and p.224; 2012), Pike (2009), Weiss (2009: 412f.) などがある (田中 2013a: §4.1 を参照)。

失われ、先行する母音の代償延長が生じる。即ち、 $*T_1eT_1.T_2- \rightarrow *T_1\bar{e}T_2-$ となる。(ゴート語 *bigētun* ‘they found’ が典型的な例なので、*bigētun-* 規則と命名する。)

- ・この規則は印欧祖語の時代に、 $*seT-$ 構造の語根にも適用された (Ved. *sāb-* ‘have conquered’⁴ < PIE $*sēǵh-$ ← $*sesǵh-$; PGmc. $*sāt-$ ‘sat’ < PIE $*sēd-$ ← $*sesd-$)

ここで想定されている完了弱語幹における $*TeTK-$ から $*T\bar{e}K-$ への変化 (あるいは発達) のメカニズムに対して、過去長い間議論があった。Schumacher の「*bigētun-* 規則」は、この変化 (発達) がすでに印欧祖語の段階で起きていたとする点、一見斬新な提案に思える。従来の説では、印欧祖語分裂後の前ゲルマン祖語 (pre-Proto-Germanic) の時代に当該の変化が生じたと考えていたが、それでは十分な説明とならない点があったからである⁵。

Schumacher (2005) の「*bigētun-* 規則」に対する批判的コメントとして Mailhammer (2007: 73) がある。4つの点からの批判を試みているが、十分に有効な批判とはなっていない。1番目として、ヴェーダ語の完了1人称複数形 *paptimá* ‘we have flown’ を挙げて、これが「*bigētun-* 規則」に従っていないことを指摘している。が、この形については、Schumacher (2005: 603) は *ReC-*、*ŪeC-* の形状の語根からの完了弱形 $*R_1aR_1C-$ 、 $*ŪaŪC-$ に模した $*T_1aT_1T_2-$ 形の復活だとしている。ヴェーダ語では印欧祖語から引き継いだ完了弱形は、*dās-* と *sāb-* が完了分詞に残ったことだけを例外として、すべて除去されたと主張している。Mailhammer が「*bigētun-* 規則」への反証として2番目に挙げる例は Gk. *πέφνε* ‘he slew’ である。これは、叙事詩 (Epic) に現れる *φένω* ‘I slay’ のアオリスト形 (cf. *ἔπεφνον*, *πέφνον* ‘I slew’) である。しかしながら、このギリシア語動詞 *φένω* の語源は不詳であり⁶、語源が分からない語を祖語の形態規則に対する反証として挙げるのは、適切とは言えない。第3点として、ゲルマン語強変化 VI 類過去形では、語幹の母音が $*ē$ (= $*\bar{e}$) ではなく $*\bar{o}$ (< pre-PGmc. $*\bar{a}$) であることを Mailhammer は挙げています。しかし、ゲルマン語強変化 VI 類過去形の母音 $*\bar{o}$ について、Schumacher (2005: pp.597f. §3.2.1) は $*\bar{o}g-$ / $*\bar{o}g-$ < $*h_2eh_2\bar{o}g^h-$ / $*h_2e-h_2g^h-$ ‘fear’ を出発点にして広がったとしている。4番目として、ゴート語強変化 VII 類動詞 *saiso* ‘sowed’ (from the PIE radix $*seh_1-$; cf. *LIV*²: 517) が「*bigētun-* 規則」に従っていないとしているが、これが「*bigētun-* 規則」への反証となるか疑問である。なぜならば、Schumacher (2005: pp.595–596) が論じるように、ゴート語強変化 VII 類動詞では畳音が二次的に付加される例が存在すると思われるからである。

これに対し、Jasanoff (2012: 128) による Schumacher の「*bigētun-* 規則」への批判は的を射ていると思われる。Jasanoff はまず、「形態化された音韻過程であって

⁴ ヴェーダ語における長母音を示すこの形態は、完了分詞 *sāb-vāms-* ‘overcoming’ として文証される (Macdonell 1910: p.353 §482.d.; Lubotsky 1997: 1506; Kümmel 2000: 565 などを参照)。

⁵ 本稿第1節の脚注2を参照されたい。

⁶ *IEW*でも *LIV*²でも、このギリシア語動詞は印欧語固有の動詞として掲載されていない。

も通常は青年文法学的な音法則として始まるが、*bigētun-* 規則の背後にはそのような規則的な音変化は発見され得ない (Even morphologized phonological processes normally begin as Neogrammarian sound laws; yet no such regular sound change can be discovered behind the *bigētun*-rule)」と主張している。更には、ヴェーダ語のふたつの完了分詞 *sāhvāms-* (: *sāb-* ‘overcome’) と *dāśvāms-* (: *dās-* ‘wait upon’) の形態的発達について「*bigētun-* 規則」に依らざる代案を提示している (同論文同ページ脚注 5)。また、完了形が過去時制に発達しなかったトカラ語やバルト語、並びにアオリストと呼ばれる範疇へ元々の完了形が貢献する度合いが低かったアルバニア語では、Schumacher の「*bigētun-* 規則」による説明が成立しないということを指摘している⁷。

次節において、Jasanoff (2012) が提供している観点以外からも Schumacher の「*bigētun-* 規則」には問題があり、批判され得ることを示す。

3. Schumacher (2005) 論考ならびに「完了形みの発達」とする論考の問題点

3.1. 「*bigētun-* 規則 (*bigētun*-Regel)」の性質について

Schumacher は印欧祖語の形態規則として「*bigētun-* 規則」を設定しているが、その前提となるのは、印相祖語の語根の構造の制約にある。第 2 節で見たように、「印欧祖語の語根は盈階母音 **e* の両側にひとつの同じ阻害音を持つことはできない；換言すれば、†*kek̑-* または †*b^heb^h-* などの構造の語根は排除される (Eine uridg. Wurzel kann nicht ein und denselben Obstruenten beiderseits des Vollstufenvokals **e* haben; mit anderen Worten, Wurzeln der Struktur †*kek̑-* oder †*b^heb^h-* usw. sind ausgeschlossen)」(Schumacher 2005: p.601 § 5) という制約が当該規則の存在理由となっているが、同じ摩擦音の組み合わせ **ses-* は印欧祖語の語根構造として容認されることを見逃してはならない⁸。**ses-* ‘ruhen, schlafen’ (cf. *LIV*²: 536f.) が印欧祖語の語根の形状として可能であったならば、“[ved.] *sāb-* < uridg. **sēg^h-* ← **sesg^h-*, [urgerm.] **sēt-* < uridg. **sēd-* ← **sesd-*” (Schumacher 2005: p.602 § 5) という議論は成立しないこととなる⁹。

⁷ トカラ語 B (あるいは西トカラ語) において、*yok-* ‘drink’ の過去形 *yāk-* が印欧祖語の畳音の付いた完了形 **h₁re-h₁rog^{wh}-* に由来し、過去語幹先頭の *y-* は現在形との類推で二次的に付加されたという考えが、Schmidt (1997: 261) によって論じられているという貴重な指摘を、匿名の査読者のおひとりからいただいた。しかしながら、Schmidt のこの提案は、広く一般的に受け入れられている訳ではない。例えば、Adams (1999: 510), *LIV*² (p.231 s.v. **h₁reg^{wh}-* ‘trinken’) では、Schmidt による *yāk-* ‘drank’ の完了形起源説を取り上げておらず、何ら言及がなされていない。Adams (2013 II: 552) では、Schmidt (1997) の提案への言及はあるが、トカラ語で完了形の定形 (finite form) が残存している例は他に見られないと、批判的見解を示している。(換言すれば、Schmidt 1997 の提案は、アドホックな仮定であると批判されている。) しかしながら、Kümmel (2017: s.v. **h₁reg^{wh}-* ‘trinken’ Anm. 2a) は、Schmidt (1997) の考えに特にコメントせず言及している。このような状況を鑑みれば、現状においてトカラ語 B の当該動詞の活用についての歴史的説明は、今後の課題として残されていると言えるであろう。しかしながら、もしも Schmidt (1997: 261) の説が正しいと判明することがあるとするならば、本文で述べた Jasanoff の主張は、その分だけ弱められることになるであろう。

⁸ この点については、Szemerényi (1996: p.99 §5.5.2) を参照されたい。

⁹ インド・イラン語派内でクリンゲンシュミットの法則 = **sVz* > **sV∅* が音法則として適用され

3.2. ゲルマン語派内での変化の相対年代について

Schumacher (2005: p.596–597 §3.1.2) は「語根先頭の喉音の消失 → 畳音と語根の縮約 → 一般的な畳音の脱落 (→ 語頭音節へのアクセントの固定化)」という相対年代 (relative chronology) を仮定している¹⁰。このように設定された相対年代では、2つの過去現在動詞の形態の由来に十分な説明ができない点が問題として残る。

まずは、第V類過去現在動詞 **naχ-/nug-* ‘be sufficient’ を取り上げたい。この動詞は、喉音で始まる語根 **h₂nek-* ‘reach’ に由来しているので、語根先頭の喉音が消失して畳音と語根が縮約を起し、一般的な畳音の脱落は関与しないはずである。PIE perf. **h₂a-h₂nók-/h₂a-h₂ŋk-*’ (cf. Ved. *ānās-/ās-*) > pre-PGmc. **ā-nók-/ā-n.k-*’ > PGmc. †*ōnaχ-/ōnug-* と変化するはずである¹¹。詳しくは Tanaka (2011: Chapter 4 §5.6.2 and §5.8) を参照されたい。この過去現在動詞に関しては、元々の畳音を脱落させた **h₂nók-/h₂ŋk-*’ > **nāχ-/nχ-*’ からの発達であることは明らかであるが (Schaffner 2001: 293f. 参照)、なぜそれが可能だったのか首尾一貫した説明が Schumacher の論考には欠けており、また説明できないと思われる¹²。

た結果、PIE **sesǵh-* ‘have overcome’ > **sezǵh-* > **sēǵh-* > Ved. *sāb-* と変化したと解釈する方が、より適切であると思われる。この点については、Klingenschmitt (1982: 129–131), Gotō (2013: p.100 fn.232) などを参照のこと。

¹⁰ Schumacher (2005: p.596 §3.1.2): “Nicht redupliziert wurden außerdem alle Präterita, deren Wurzel mit Laryngal anlautete, da hier die Reduplikationssilbe mit der Wurzelsilbe bereits kontrahiert war.” Schumacher (2005: p.597 §3.1.2): “Das Datum der Reduplikation lässt sich relativchronologisch festlegen: *terminus post quem* ist der Verlust der wurzelanlautenden Laryngale bzw. die darauffolgende Kontraktion benachbarter Vokale; *terminus ante quem* ist das Eintreten der germanischen Anfangsbetonung, denn nur bei den grundsprachlichen Betonungsverhältnissen, gemäß denen die Reduplikationssilbe immer unbetont war, ist eine Reduplikation denkbar.”

¹¹ もし **ne-nāχ-/ne-nχ-*’ という形態だったならば、畳音の脱落の過程を経て PGmc. **naχ-/nug-* が得られたであろうが、pre-PGmc. **ā-nók-/ā-n.k-*’ ならば、畳音の脱落の過程によって PGmc. **naχ-/nug-* に発達したとは考えられない。Kim (2012: 207) は、PIE **h₂e-h₂nó(n)k-* → **ne-nab-* と仮定するが、このような想定を直接裏付ける経験的証拠を挙げていない。ヴェーダ語ではこのような形態変化は生じずに、音法則通りの形態である *ānās/ās-* (< **h₂a-h₂nók*, **h₂a-h₂ŋk-*) と *ānāms/ānās-* (< **h₂a-h₂nónk*, **h₂a-h₂ŋk-*) が完了形として用いられている事実、注意すべきである (Kümmel 2000: 284ff; Tanaka 2011: 211 などを参照)。また、**ne-nāk-/ne-n.k-*’ という改新を受けた完了形を直接反映する動詞形態は印欧語の資料から見出せないことも、重要である (LIV² 2001: 282–284; Tanaka 2011: 209–210 参照)。本稿ではこの証拠に基づいて、前ゲルマン祖語において、印欧祖語から受け継がれた **h₂a-h₂nók*, **h₂a-h₂ŋk-*’ が完了形の形態として存続し続けたと考え、以下の議論を継続する。(§4.1 節において、ゲルマン語過去現在動詞 **naχ-/nug-* ‘be sufficient’ の発達を考察する際も、この考えに従うこととする。)

¹² 匿名の査読者のおひとりから、*HReRC-*, *HReC-* の形を取る語根について、喉音脱落後に後続の共鳴音による畳音音節が形成される例が、トカラ語過去分詞 (preterite participles) に見られるという貴重なご指摘をいただいた。PIE **h₁leudh-* ‘steigen, wachsen’: Toch. *lā-n-t-* ‘go out, emerge’, 過去分詞 Toch.A *lalntu/altu*; PIE **h₂neh₃-* ‘tadeln’: Toch. *nāk-* ‘reprove, condemn’, 過去分詞 Toch.A *nānku*, B *nanāki*; PIE **h₃reg-* ‘gerade richten, ausstrecken’: Toch. *rāk-* ‘extend (over), cover’, 過去分詞 Toch.B *rarákau* などがその例である。このことは、同様の形状の語根について、印欧祖語から分裂した後に各語派において、同様の改新 (innovation) が生じ得たことを示唆する経験的証拠となると考えられる。(トカラ語の過去分詞の歴史的発達がどのようなものであったかについての論考は、Peyrot 2010 およびそこに挙げられた文献を見られたい。) また、**h₁leud-*

次は、古英語の繫辞 (copula) 2 人称単数形 (Mercian *earð*, Northumbrian *arð*, West Saxon and Kentish *ear̄t*; cf. Brunner 1965: 352–354) に保存されている過去現在動詞である (< PGmc. **ar-þ(a)* ‘thou art’). Schumacher (2005: pp.593–594 § 3.1.1) によれば、これも畳音のついた完了形 **ōrþa* < **h₃o-h₃ór-th₂a* に由来しており、語根の母音が短母音となったのは、オストホフの法則 (Osthoff’s law) による短化のためとしている。しかしながら、完了 2 人称単数形を受け継いでいると想定される形態で、オフトホフの法則の例外と見える例が存在する (e.g. ON *för-t* ‘you fared’). これは、2 人称単数形以外ではオストホフの法則による短化を受けなかった (e.g. PGmc. sg. 1. **för(-a)*, 3. **för(-e)*) ので、それらの影響で (即ちパラダイム内の均一化により) 長母音を持つ形が 2 人称単数形に復活したと見るができる (即ち **för-þ(a)* > **för-þ(a)* → **för-t*)¹³. この点を考慮すれば、古英語繫辞 2 人称単数の形態は、元々語根の母音が短かった (即ち PGmc. **ar-þ(a)* < pre-PGmc. **h₃ór-th₂a*) と解釈するのが妥当

‘steigen’については、定型の完了形においても、同様に畳音を改変した例がインド語などで見出せる (Ved. *rurubur* ‘sind gesteigen, gewachsen’, cf. YAv. 完了分詞 *urirudus-* ‘gewachsen’; 詳細は LIV² 2001: 248f. を参照). このことは、ゲルマン語派においても同様のことが生じ、前ゲルマン祖語の段階で **h₂nek-* ‘reach’ の完了形が **ne-naχ-* と再解釈された可能性 (上の脚注 11 で言及した Kim 2012: 207 の考えを参照) が皆無ではないことを示唆する。しかしながら、たとえこのようなことが生じていたと仮定しても、本稿の §3.3. で論じるように、Schumacher (2005) が提案する「*bi-gētun* 規則」に基づく議論では、当該過去現在動詞の現在複数形が、PGmc. **nug-* となったことが説明できず、PGmc. †*nēg-* という長母音を持つ形態が発達したことを予測することになり、Schumacher 論考の弱点となることには変わりはない。

¹³ Schumacher (2005: pp.593–594 §3.1.1) は、「喉音消失とそれに伴う代償延長」→「過去現在動詞という動詞範疇の確立」→「オストホフの法則の適用」という相対年代を想定していると考えられる。また、強変化第 VI 類動詞について、Schumacher (2005: pp.597–598 §3.2.1) は、過去現在動詞の **ōg-/ōg-* ‘fear’ (< **h₂eh₂ōg^h-/h₂eh₂g^h-*) がその活用パターンの基盤を与えたという説明を提案している。その考えに従うならば、「喉音消失とそれに伴う代償延長」→「過去現在動詞という範疇の確立」→「強変化 VI 類動詞という範疇の確立」→「オストホフの法則の適用」という相対年代が想定されることになるであろう。LIV² (2001: pp.472–473) によれば、動詞語根 **per-* ‘hindurchkommen, durchqueren’ は、印欧祖語において完了形を形成しなかったということであるが、ゲルマン祖語において強変化第 VI 類動詞 **far-* ‘fare’ へと発達したことから、(Schumacher 2005 の説明によるならば) 元々の完了形 **ōg-/ōg-* ‘fear’ (< **h₂eh₂ōg^h-/h₂eh₂g^h-*) の活用パターンに倣うことになったということになる。このように、Schumacher (2005) の提案に沿って考察するならば、ON *för-t* ‘you fared’ のように語根に長母音を示す強変化第 VI 類 2 人称単数過去形が存在することは、過去現在動詞 2 人称単数現在形 **ar-þ(a)* ‘thou art’ が短母音を示すことの説明に、齟齬をきたすことになると思われる。

しかしながら、ゲルマン語研究において、強変化第 VI 類動詞の活用パターンがどのようにして確立したのかについて、遍く受け入れられている定説は存在せず、異なる説が唱えられているのが現状である点については、注意しておきたい。例えば Bammesbeger (1986: 51f.) は、語根 **steh₂-* の完了形 **ste-stā-* と、再解釈された語根アオリスト **stāt-e* (← **stā-t*) が混交したものが、強変化第 VI 類過去形の基盤となったと提案している。これに対し、Jasanoff (1994: 273f.) や Fortson (2010: 346) は、ラテン語の *scabō: scābī* ‘I scrape(d)’, *fodiō: fōdī* ‘I dig/dug’ に相当する動詞が、強変化第 VI 類の *a-ō-ō-a* という活用パターンの基盤を提供したと考えている。このように、強変化動詞第 VI 類がどのように発達したのかは未解決の問題として残るものの、本稿では、強変化第 VI 類動詞の活用パターンは、何らかの形で完了形を受け継いでいると考えられる。ゲルマン語におけるオストホフの法則に関する近年の論述として、Jasanoff (1994: 259 and 274), Ringe (2006: 75–78) などを参照されたい。

でないだろうか。オストホフの法則による母音の短化はゲルマン祖語の時代に適用されたものであり、その時代には当該過去現在動詞は2人称単数形のみならず、全人称の活用形を保っていたと考えられるので (sg. 1. **ar-(a)*, 2. **ar-þ(a)*, 3. **ar-(e)*, pl. 1. **ur-um*, 2. **ur-up*, 3. **ur-un*), オストホフの法則による母音短化を受けた形が、パラダイム全般に一般化されたとは考えにくい。換言すれば、Schumacher の議論が有効となるためには、オストホフの法則が適用された時点で既に当該過去現在動詞は2人称単数形しか残っていなかったという仮定が必要となるが、これはありそうにないことである。上述の第V類過去現在動詞 **naχ-/nug-* ‘be sufficient’ と同様、第IV類過去現在動詞 **ar-/ur-* ‘be’ も、元々喉音で始まる動詞語根に由来するものの、畳音を失った形がゲルマン語方言に継承されていると解すべきである。

これらふたつの過去現在動詞についてのみ考えれば、「*Te-TK-*型の畳音の付いた完了複数形が *TēK-*型の語幹に取って代わられた時には、過去現在動詞は既に畳音が付いていなかった (preterit presents were already unreduplicated in pre-Germanic at the time when reduplicated perfect plurals of the type *Te-TK-* were replaced by stems of the type *TēK-*)」とする Cowgill (1960: 489) の見解が、有効にも思える。しかしながら、第I類に分類される **aiχ-/aig-* ‘possess, own’ (< **HeHōik-/HeHik-*; cf. Schumacher 1998: p.189 fn.21) と第VI類の **ōg-/ōg-* ‘fear’ (< **h2eh2ōgʰ-/h2eh2gʰ-*; cf. Schumacher 2005: p.597 §3.2.1) は、明らかに元々の畳音を縮約した形を受け継いでいる。**naχ-/nug-* ‘be sufficient’ と **ar-þ(a)* ‘thou art’ は元々の畳音を失った形が継承される一方、**aiχ-/aig-* ‘possess, own’ と **ōg-/ōg-* ‘fear’ は元々の畳音を保った形が受け継がれたのはなぜなのか、謎が残るままである。Schumacher (2005) の論考も含めて、従来の「完了形のみに由来する」とする説では、この点がうまく説明できないように思われる¹⁴。

過去現在動詞をめぐるこれらの問題はさておき、語根先頭の喉音の消失、そして畳音と語根母音の縮約の後に、大規模な畳音の消失を Schumacher は仮定している。その一般的な畳音の消失のメカニズムについては、「*bigētun-*規則」を受けたV類動詞に生じた、過去単数形(畳音あり)と過去複数形(畳音なし)の形態的な不均衡を解消しようとするところから始まったというシナリオを与えている。この点については、ゲルマン語強変化動詞過去形の畳音消失のメカニズムについて、新たな仮説を提案していると評価できるかもしれない。しかしながら、過去現在動詞もこれと同じメカニズムで畳音を消失したと考えている点には、注意が必要である。この点について、以下の §3.3 で検討してみたい。

¹⁴ 強変化IV、V類過去複数形の語根に生じる長母音の由来を、元々存在した畳音との縮約に帰すと、対応する過去現在動詞(IV、V類)の現在複数形の形態に説明がつかないことは、従前から指摘されてきた。この点に関して、Armitage (1911: 138)などを参照されたい。

3.3. IV, V 類に属す強変化過去複数形と過去現在動詞現在複数形の形態的差異について

Schumacher の論考では、V 類動詞の過去複数形の長母音は **āt-* ‘ate’ (< **h₁e-h₁d-*) のみならず¹⁵ (Schumacher 2005: p.598 § 3.2.3) ¹⁵, 「*bigētun-* 規則」によってもたらされた **fēt-* ‘stepped’, **gāt-* ‘got’, **pāg-* ‘received’, **gāb-* ‘gave’, **k^wāp-* ‘said’ (Schumacher 2005: p.603 § 5) ¹⁶ がその起源となったとされている。強変化第 V 類過去複数形の長母音を従来 **āt-* ‘ate’ にのみ帰す議論があったが (田中 2013a: § 3.4 を参照), 複数の動詞に当該長母音の起源を設定できる点は、この理論の長所と言えそうである。

これに続き、上記の動詞に端を発する長母音を含んだ過去複数形態はその後、他の **R/ŪeT-* 語根を持つ V 類動詞に、そして **CeR-* 語根を持つ IV 類動詞全体に広がったとし、そのような拡張の理由は、それらの形態が類似していたからだとして Schumacher (2005: p.603 § 5) は主張している ¹⁷。ここで問題となるのは、何故 **ReT-* 語根を持つ V 類過去現在動詞 **nug-* ‘are sufficient’ や **CeR-* 語根を持つ IV 類過去現在動詞 **mun-* ‘think’, **skul-* ‘have debt’ に、当該の長母音を持つ形態が拡張しなかったのかということである。この問題に対して Schumacher (2005: p.598 § 3.2.2) は、「第 IV 類の過去現在動詞 (**man-/mun-*, ... **skal-/skul-*, ...) は低減階梯の弱語幹 (**mun-*, **skul-*) を持つので、[強変化 IV 類動詞過去複数形の] 延長階梯 [母音] は二次的なものと見なされなければならない (Da ... die Präteritopräsentien der 4. Klasse (**man-/mun-*, ... **skal-/skul-*, ...) einen schwundstufigen schwachen Stamm haben (**mun-*, **skul-*), ist die Dehnstufe als sekundär zu betrachten ...)。」としか述べていない (また、p.603 § 5 でも同様の言を繰り返すのみである)。強変化動詞過去形は対応する (語幹形成母音による) 現在形 (thematic present) との間に明瞭な形態的差異を獲得する必要があり (Matzel 1970: 178–179; Motausch 2000: 52–53; Schumacher 2005:

¹⁵ Schumacher (2005: p.598 § 3.2.3): “Zumindest bei **et-e/a-* ‘essen’, das traditionell zur 5. Klasse gerechnet wird und das zu allen Zeiten ein im Alltag sehr häufiges Verb gewesen sein muss und somit grundsätzlich als Prototyp geeignet wäre, geht die Dehnstufe des schwachen Stamms deutlich erkennbar auf den schwachen Stamm eines uridg. reduplizierten Perfekts zurück: Der schwache Stamm **āt-* lässt sich unmittelbar auf uridg. **h₁eh₁d-* zurückführen ...”

¹⁶ Schumacher (2005: p.603 § 5): “Das Germanische besitzt drei Primärverben mit zweiradikaligen Obstruentenwurzeln, bei denen ein ererbtes Perfekt wahrscheinlich bzw. durch Gleichungen nachweisbar ist: **fēt-e/a-* (**ped-*, LIV² 458), **gēt-e/a-* (**g^hed-*, LIV² 194) und **pēg-i/ja-* (1. **tek-*, LIV² 618f.); ferner wird ein ererbtes Perfekt bei **geb-e/a-* (**g^heb^h-*, LIV² 193) und **k^wēp-e/a-* (**g^hēt-*, LIV² 212) von Kümmel (LIV² s. *ov.*) für möglich gehalten.”

¹⁷ Schumacher (2005: p.603 § 5): “Klar ist aber auch, dass **T₁eT₂-* Wurzeln und **R/ŪeT-* Wurzeln einander hinreichend ähnlich sind, sodass der eine Wurzeltyp die Bildweise des anderen übernehmen konnte. ... Umgekehrt hat die Ähnlichkeit von **T₁eT₂-* Wurzeln und **R/ŪeT-* Wurzeln im Germanischen (oder in dessen Vorstufe?) dazu geführt, dass die schwachen Perfektstämme der **R/ŪeT-* Wurzeln im Germanischen nach dem Vorbild von **T₁ēT₂-* (< **T₁ēT₂-*) die Form **R/ŪeT-* erhielten. Zu einem späteren Zeitpunkt wurde die Bildweise von **T₁ēT₂-* auch auf **CeR-* Wurzeln übertragen (**k^wēm-*, Wz. **g^hem-*, ...). Dabei handelt es sich aber um eine strikt einzelsprachliche Entwicklung des Germanischen, denn der schwache Stamm **mun-* (dederupliziert aus **me-mun-* < **me-m^hn-*) zeigt, dass sich **CeR-* Wurzeln ursprünglich anders verhielten als **T₁eT₂-* und **R/ŪeT-* Wurzeln ...”

597; Mailhammer 2007: 97; 田中 2013a: § 3.3 and § 4.4などを参照), 過去現在動詞現在形はそのような必要がなかったという観点からの説明が, 考えられるかもしれない。しかしながら, 過去現在動詞現在形は対応する現在形がないがゆえに(それ自身が現在形のため), 古形を保つ必要(必然性)もなかったと言える。強変化V類動詞過去複数形の $*T_1\bar{e}T_2-$ (< $*T_1\bar{e}T_2-$)の形態が, 大規模に $*R/\bar{U}T-$ (あるいは $*R/UT-$)形態および $*C.R-$ (あるいは $*CR-$)形態に拡がったとするならば, 同じ構造の $*nug-$ や $*mun-$, $*skul-$ にも拡がり, $\dagger n\bar{a}g-$ や $\dagger m\bar{a}n-$, $\dagger sk\bar{a}l-$ となったと考えられる。なぜこうならなかったか, 未解決の問題として残る。

また, 上記の議論からして, Schumacher (2005) の「bigētun- 規則」に基づく論考では, もし $*T_1\bar{e}T_2-$ 語根から派生した過去現在動詞があったとしたならば, それは過去複数形に印欧祖語から受け継いだ $*T_1\bar{e}T_2-$ (< $*T_1\bar{e}T_2-$)形態を示したということを示すことになる。実際にそのような過去現在動詞はゲルマン語資料にはなく, この見解に反証を与えることはできないが, この点は注意しておいてよいと思われる。

畳音消失は強変化動詞も過去現在動詞も共通しているのに(本稿 § 3.2. 参照), なぜ長母音の拡張が過去現在動詞では阻止されたかという点が説明できない点, Schumacher 説の弱点となっていると言ってよい。

3.4. 強変化動詞 V 類過去複数形に散発的に見られる語根末摩擦音の有声化について

Prokosch (1939: 163 and 183–186) は, 強変化動詞 I, II, III 類においては過去複数形でほぼ規則的にヴェルナーの法則による語根末摩擦音の有声化が見られるのに対し, 強変化 V, VI, VII 類では過去複数形のヴェルナーの法則適用が不規則的, あるいは散発的であることを観察している。このことから Prokosch は, ゲルマン祖語では強変化第 I, II, III 類では過去単数形には語根にアクセントが置かれ, 過去複数形には語尾にアクセントが置かれるものの, 他のクラスでは, このアクセントの分布のあり方が異なっていたのではないかと示唆している¹⁸。本稿に関連して問題と

¹⁸ Prokosch (1939: 163): “Verner’s Law ... is remarkably regular in classes I, II, III, but in classes V, VI, VII it is either entirely missing, or it appears sporadically and in irregular distribution over tenses. This indicates that the assumed distribution of the accent (root accent in singular, suffix accent in the plural) is valid only for the first three classes, while the other four classes had different accent conditions.” *op.cit.* pp.183ff.:

Old High German: Class V. *s/z:* with *lesan*, *lārun* occurs, but *lāsun* is more frequent in every century. *jesan*, *kresan*, *gīnesan* have no change (except for the very rare *ginārun*). *wārun*, however, is used everywhere (but the participle in *gīwesan* has *s*, although here we surely should expect Verner’s Law). ...

...
Old English: Class V. 4 verbs have the change regularly: *sēon*, *gefēon*, *wesan*, *cwēpan* (the last is not quite certain on account of the confusion between *ð* and *d*). *genesan*, *lesan* do not change. For *sēon*, *gefēon*, the desire for contrast to the present may have been a contributing factor, since the unchanged forms of the preterit plural would have been *sōn*, *gefōn*.

Old Norse: Class V. *wesa* has the change, which later is transferred to the present and preterit singular (*vera*, *var*, *vǫro*), probably due to lack of sentence stress; as in West Germanic, *siā* has *sōm* in the

なるのは、ゲルマン語強変化 V 類動詞の過去複数形では、なぜ I-III 類の過去複数形のように規則的なヴェルナーの法則の適用が見られず、散発的にのみ適用例が見られるのかということである。強変化 V 類過去複数形も、ゼロ階梯語根にアクセントのある語尾が続く完了複数形からの発達ならば、I-III 類の過去複数形でそうであるように、規則的にヴェルナーの法則が適用されるはずではないだろうか。

Schumacher (2005) は、強変化 V 類過去複数形の由来の説明を試みるにあたって、この問題について全く考慮していない。彼の「*bigētun*-規則」に基づく説明（のみ）では、この現象に説明を与えられないことは明らかである。即ち、強変化動詞 V 類の過去複数形は語尾にアクセントのある形態からの発達とされるので、強変化 I-III 類の過去複数形と同様に規則的にヴェルナーの法則が適用されることが予測されるからである。ちなみに Mailhammer (2007: 77f.) は、この現象を「印欧祖語分裂後の発達」のためとしているが、その「発達」のメカニズムを明らかにしていない¹⁹。この現象には、強変化動詞 V 類の歴史的発達過程を明らかにする重要なヒントが含まれるように思われるが、なぜ散発的にのみヴェルナーの法則が適用されるかを解明しようとする、本格的なアプローチが未だ見られないでいる。（この問題については、田中 2013a: § 3.6 も参照されたい。）

3.5. まとめ

本節の議論の結果、次のことが言える。まずは Schumacher (2005) 論考、特に「*bigētun*-規則」を設定することによって得られる利点として、次の 2 点を挙げることができる：

- i) ゲルマン語強変化動詞に見られる大規模な畳音消失のメカニズムについて、一定の見解を与えている。（本稿 § 3.2 参照。しかし、畳音消失が強変化動詞と過去現在動詞で共通しているのに、過去現在動詞では複数形に長母音の拡張が見られない点が説明できないという欠点も、同時に含んでいる。）
- ii) 強変化 V 類から IV 類への長母音の拡張を論じる際、従来 **ǣt*-‘ate’のみがその基盤とされていて、1 つの動詞から V 類全体へそして IV 類全体へと長母音

preterit plural.

¹⁹ Mailhammer (2007: 77f.): “The type of proposed stem formation (i.e. a perfect without reduplication and inner-paradigmatic ablaut but with an alternating accent and lengthened grade in the unaccented stem) that has to be assumed because of the effect of Verner’s Law in class V verbs (e.g. OE *wæs* ‘was’: *wæron* ‘were’, *cwæþ* ‘he spoke’: *cwædon* ‘we spoke’) does not fit into the morphological system of Indo-European at all. Alternating root accent is only found in athematic paradigms, where it is usually accompanied by ablaut, i.e. a strong vs. a weak stem. It is hardly plausible that the lengthened grade occurred in unaccented position, especially given that all known stem formations with lengthened grade in the strong (accented) alternant usually have full grade in the weak (unaccented) stem.” *Op. cit.* p.78: “It seems therefore more likely that some post-Indo-European development took place, perhaps involving the special structural circumstances of class V. This may then explain the Germanic situation, but it may not hold true for other long vowel preterits in the related languages.” この点に関して、本稿で提案する形態的混交説に基づく説明図式については、以下の §4.2 の論を見られたい。

を持つ動詞活用形が拡張するということがあり得るかという点が問題だった (Mottausch 2000: 47–51; Ringe 2006: 186; Mailhammer 2007: 80–84 参照)。しかし、「*bigētun*-規則」の設定により、長母音を持つ動詞活用形は複数の動詞に帰することができるようになっていいる。(本稿 §3.3 参照。しかし、異化による語根頭の子音の消失と畳音母音の代償延長という提案の方が、より多く長母音語幹の基盤を与えるとも言える。)

これに対して、Schumacher (2005) 論考ならびに従来の「完了形のみからの発達」とする説の欠点として次の4点が挙げられる。

- i) **seT-* 語根の動詞にも「*bigētun*-規則」が適用され、**sesT-* → PIE **sēT-* となったという議論は、PIE 語根に **ses-* が許容されることから成立しない (§3.1)。
- ii) 仮定される相対年代からは、第 V 類過去現在動詞 **naχ-/nug-* ‘be sufficient’ の形態発達が説明できない (†*ōnaχ-/ōnug-* とならなかったことを明瞭に説明できない)。また古英語繫辞 2 人称単数形に残る過去現在動詞の形態 (< PGmc. **arþ(a)* ‘thou art’) についての説明も、疑問が残る (§3.2)。
- iii) 強変化 V 類動詞過去複数形態 **T₁ēT₂-* が大規模に **R/UT-* (あるいは **R₁UT-*) 形態および **C₁R-* (あるいは **C₁R₂-*) 形態に広がったとするならば、同じ構造を成す過去現在動詞の **nug-* や **mun-*, **skul-* にも広がり、†*næg-* や †*mæn-*, †*skæl-* とならなかった理由が説明できない (§3.3)。
- iv) 強変化 V 類動詞過去複数形に散発的に見られるヴェルナーの法則の適用について、説得力のある説明を与えられない (§3.4)。

これら4つの問題点からして、Schumacher (2005) の論考は、ゲルマン語強変化動詞過去複数形の長母音について、かつては「異化による2番目の阻害音の脱落とそれに伴う母音の代償延長」(Sihler 1995: 582 参照)²⁰としていたものを、印欧祖語の形態規則としての「*bigētun*-Regel」に置き換えただけでも、それによって従来未解決だった(あるいは不問に付されてきた)問題(上記 ii), iii), iv)) に対して新たな光を投じるところがほとんどないと言える。

4. 形態的混交説に基づく提案

第3節では、Schumacher (2005) の「*bigētun*-規則」に基づく論考の問題点を論じた。Schumacher の論考も含めて、「完了形にのみ基づく」という見解に問題があるとすれば、どのような代案を提示できるかが課題となる。本節で提案するのは、次のことである。ゲルマン語の過去現在動詞現在形と強変化動詞過去形とは、形態的に共

²⁰ Sihler (1995: 582): “There is an important difference between the Gmc. developments and those of Indic (*sed-*) and L (*sēd-*): in the latter two we are dealing with the action of specific sound laws operating on consonant clusters, whereas the development of Gmc. **bēr-*, **sēt-* (and dozens of others) was a dissimilatory process.”

通するところが多いが、一部大幅に相違するところがある (IV, V 類の複数形が典型的にそうである)。このことを説明するために、両者の起源について共通する部分と相違する部分があると提案したい。具体的に言えば、双方共通する要素として印欧祖語の完了形を (部分的に) 継承しているものの、過去現在動詞は完了能動形と現在中動形 (あるいは完了中動形) が混交して生じたものであり、強変化動詞過去形は完了能動形と未完了能動形が混交して生じたものであるという点で相違がある、と考えられる²¹。

4.1. 過去現在動詞 (Tanaka 2011 の論考と関連して)

Tanaka (2011: 241f. et passim) は、印欧諸語の対応動詞の形態的証拠に基づき、ゲルマン語過去現在動詞を次の3つの範疇に分類している: ²²

1. 通常型 ('normal' type) ゲルマン語過去現在動詞を代表するグループで、印欧祖語の「状態的自動体系 (stative-intransitive system; see Jasanoff 2003: 155ff.)」²³ を構

²¹ ゲルマン語における過去現在動詞と強変化動詞について、形態的混交説に基づいたこのような由来の違いを想定することで、本稿では扱わない別の問題にも新たな解決策が提案できる可能性がある。即ち、ゴート語においては、強変化 I-VI 類動詞の過去複数形でヴェルナーの法則による摩擦音有声化が適用された例がひとつも見られないのに対し、強変化動詞 VII 類の過去単数複数形および過去現在動詞の現在複数形では摩擦音有声化の例が部分的に見られる。ゴート語においてこのようにヴェルナーの法則適用の分布が動詞範疇間で顕著に相違する現象は、Tanaka (2015: §2.2) が論じるように、単に類推による均一化 (analogical leveling) を仮定するだけでは、首尾一貫した説明が困難である。形態的混交説によって、ゴート語のこの現象にどのような説明が与えられるかは、稿を改めて論じることとする。

²² Tanaka (2011) が提案する形態的混交説によるゲルマン語過去現在動詞の歴史的発達の説明についての論評は、Ringe (2011), Kim (2012), Ringe and Taylor (2014: 519), Frotscher (2014), Randall and Jones (2015) などを参照されたい。これらの論評に関しての包括的議論は、本稿では行わない。

²³ Jasanoff (2003: 155ff.) が設定する「状態的自動体系」は、1) 中動語根アオリスト形 (middle root aorist), 2) 状態的完了形 (stative perfect), 3) *ie/o-* 現在形 (*ie/o-*present), 4) 語根状態的-自動現在形 (root stative-intransitive present) から成立する体系である。4) の範疇は、ゼロ階梯の語根 (zero grade of the root), 語幹形成母音によらざる中動活用 (athematic middle inflection), 3人称単数形での歯音を含まない語尾 **-o(r)* (the dentalless ending **-o(r)* in the 3 sg.), 状態的非完了的な変化 (a non-perfective change of state) を表すことが、その特徴である (Jasanoff 2003: 158 参照)。また、Jasanoff (2003: p.155 fn.22) が述べるように、「状態的自動体系」とはひとつの標号 (label) であり、厳密な意味での「自動詞」ばかりではなく、目的語かそれに相当するものを従える動詞も含まれるという点に、注意する必要がある。このため、ある動詞語根がこの「体系」に属するか否かは、上に述べた4つの動詞形態を示すか否かが、判断の基準となる。また、Jasanoff (2003: p.160 Table 6.1) は、この「体系」に属する典型的な動詞 (語根) として13の例を挙げているが、それらのうち6例について、該当する4つの動詞形態のうち1つないしは2つがその反映形を印欧語資料の中で見出せないことに、注意が必要である。(**suep-* 'fall asleep' と **uāg-* 'break' は中動語根アオリスト形の反映形が印欧語資料に見られず、**leuk-* 'shine', **uāg-* 'break' と **ueik-* 'enter' は *ie/o-* 現在形の反映形が生じず、**genbi-* 'bear' と **mer-* 'die' は語根状態的-自動現在形の反映形が印欧語資料に見出せない。これらの語根の形状や意味については、Jasanoff 2003: 163-173 を参照のこと。) 印欧祖語においては共存していたと思われる4つの動詞形態のうち1あるいは2つが、互いに表す意味が近いこともあって文献が生じる時代までに失われた、あるいは文証される印欧語資料に限

成した動詞語根から生じている点の特徴である。完了能動形と（語幹形成母音によらざる）現在中動形の混交から発達した：**wait-* ‘know’, **daug-* ‘suffice, avail’, **dars-* ‘dare’, **parf-* ‘need’, **man-* ‘think’, **naχ-* ‘be sufficient’, **mōt-* ‘have room’, and **ar-* ‘be’. (**lais-* ‘know’ と **skal-* ‘owe, have debt’ は、印欧語で対応する動詞が不十分なため分析が困難であるが、この型に属すと予想される。)

2. 準通常型 (‘quasi-normal’ type) 完了能動形と完了中動形の混交から発達した：**aig-* ‘possess’ and **ōg-* ‘fear’.

3. 現在中動形起源 (present middle origin)

subtype i) 鼻音接中現在中動形 (nasal-infixing present middle) と上記 1 の過去現在動詞の活用パターンとの混交から発達：**kann-* ‘know’²⁴ and **ann-* ‘love, grant’.

subtype ii) 語幹形成母音によらざる現在中動形と上記 1 の過去現在動詞の活用パターンとの混交から発達：**mag-* ‘have power’.²⁵

過去現在動詞の発達過程では、同じ動詞の異なる形態が混交して生じているので、強変化動詞に比べて数が限られていると考えられる。

この仮説に従えば、第 V 類過去現在動詞 **naχ-/nug-* ‘be sufficient’ がなぜ元々の畳音を失ったかという問題に、次のように答えられる。(3) に示すように、完了形 3 sg. **h₂a-h₂nók-e*, 3 pl. **h₂a-h₂nék-ǵs* (> 3 sg. **ō-naχ(-e)*, 3 pl. **ō-nug-ur*) と語幹形成母音によらざる現在中動形 3 sg. **h₂n.k-(t)ói*, 3 pl. **h₂n.k-ǵtói* (> 3 sg. **nug-(p)a(i)*, 3 pl. **nug-unpa(i)*)²⁶ との混交により、3 sg. **h₂nók-e*, 3 pl. **h₂n.k-ǵt* (> 3 sg. **naχ(-e)*, 3 pl. **nug-un*) が

られているため、偶々文献に生じなかった、等々の理由が考えられる。

²⁴ ゲルマン語過去現在動詞 **kann-* ‘know’ が印欧祖語現在中動態起源であるという Tanaka (2011: 145–180) の見解は、Kümmel (2017: s.v. **ǵneh₃*- Anm. 9) でも言及されている。

²⁵ この過去現在動詞について、匿名の査読者のおひとりから、Birkmann (1987: 72–74) のように V 類 **meg^b-*, VI 類 **mag^b-* という 2 つの語根からゲルマン諸語の形を導く説も存在するという指摘をいただいた。しかしながら、本稿が援用する Tanaka (2011: 199–208) では、この「2 つの語根説」は採用しない。古ノルド語 *meg-* や、古高ドイツ語や古サクソン語の *mug-* は、ゲルマン祖語分裂後に生じたアナロジーによる産物だと考える。(前者については、LIV² p.422 s.v. **mag^b-* Anm. 6 を見られたい。また、後者については、Kümmel 2017: s.v. **mag^b-* Anm. 7 が Tanaka 2011 の論述を取り上げている。) 当該の過去現在動詞の語根は、語根静止 1 型の母音交替を特徴とする **mág^b-/máǵ^b-* であり、弱形語根を用いる語幹形成母音によらざる現在中動形に由来すると Tanaka (loc. cit.) は考えており、この見解は Kümmel (2017: s.v. **mag^b-* Anm. 2) で言及されている。

²⁶ 動詞語根 **h₂nék-* ‘reach’ は、印欧祖語の「状態的自動体系」の構成要素である 1) 中動語根アオリスト形、2) 状態的完了形、3) *je/o-* 現在形の存在を裏付ける経験的証拠が、印欧語資料に存在する。1) 中動語根アオリスト形 **h₂nyk-tó* は、ヴェエダ語 *áyta* に受け継がれている(インド語の特徴として、アオリスト形には語頭に加音が付くので、*(*h₁)é-h₂nyk-to* の反映形となっている点に、注意したい)。2) 状態的完了形 **h₂a-h₂nók-*, **h₂a-h₂nyk-* は、ヴェエダ語 *ánás*, *ās-* に継承されている(ヴェエダ語では、鼻音が挿入された完了形 *ánáms-*, *ánás-* < **h₂a-h₂nónk-*, **h₂a-h₂nyk-* も、文証されている)。3) *je/o-* 現在形 **h₂nyk-je/o-* は、古ラテン語 *nancio* ‘I attain’ に(間接的に)反映されている(García Ramón 1999: 64f.; LIV² pp.282–283, note 10a などを参照)。4) 語根状態的 - 自動現在形 **h₂nyk-(t)ói* は、直接その形を反映する動詞形態が印欧語資料に見出せないが、上の脚注 23 でも述べたように、「状態的自動体系」を構成する動詞形態のうちの 1 つが印欧語資料で見出せないことは、決して希ではない。動詞語根 **h₂nék-* ‘reach’ は印欧祖語

発達した²⁷。(詳細は Tanaka 2011: 208–214 を参照。)

(3) 過去現在動詞 *naχ-「十分である」の生成 (Tanaka 2011: 212 参照)

	完了能動形	現在中動形	→	過去現在動詞
1 sg.	*h ₂ a-h ₂ nók-h ₂ a > *ō-naχ-a	*h ₂ n.k-h ₂ ái > *nuχ-ai		*h ₂ nók-h ₂ a > *naχ-a
2 sg.	*h ₂ a-h ₂ nók-th ₂ a > *ō-naχ-ta	*h ₂ n.k-th ₂ ái > *nuχ-tai		*h ₂ nók-th ₂ a > *naχ-ta
3 sg.	*h ₂ a-h ₂ nók-e > *ō-naχ-e	*h ₂ n.k-(t)ói > *nuχ-tai		*h ₂ nók-e > *naχ-e
			or	*nuχ-ai
3 pl.	*h ₂ a-h ₂ n.k-ǫs > *ō-nuχ-ur	*h ₂ n.k-ǫt(ói) > *nuχ-un(pai)		*h ₂ n.k-ǫt > *nuχ-un

第 IV 類過去現在動詞 *man- ‘be mindful’ についても、同様に完了形と語幹形成母音によらざる現在中動形との混交から発達したと説明できる (はじめから、長母音語幹が生じる要素がないことに注意されたい; 詳細は Tanaka 2011: 192–197 を参照)。

(4) 過去現在動詞 *man-「思っている」の生成 (Tanaka 2011: 195 参照)

	完了能動形	現在中動形	→	過去現在動詞
3 sg.	*me-món-e > *me-man	*mŋ-(t)ói > *mun-(ǫ)a		*món-e > *man
3 pl.	*me-mŋ-ǫs > *me-mun-ur	*mŋ-ǫt(ói) > *mun-un		*mŋ-ǫt > *mun-un

第 IV 類に分類されるべき過去現在動詞 *ar- ‘be’ についても、同様に完了形と語幹形成母音によらざる現在中動形との混交から発達したと説明できる (Tanaka 2011: 246–250 参照)。

において、4) 語根状態的 -自動現在形 *h₂ŋk-(t)ói も備えていて、それが前ゲルマン祖語に受け継がれたと想定することは、十分に可能である。尚、印欧祖語の語根状態的 -自動現在形 *h₂ŋk-(t)ói は、間接的にヴェーダ語の完了中動形 *ānasé* (< *h₂a-h₂ŋk-ói; Macdonell 1910: 359 参照) に受け継がれていると、私は考える。類似の例が、「状態的自動体系」を成す他の動詞語根にも見られる。例えば *uāǵ- ‘break’ に関して、印欧語資料の中でその反映形を見出すことのできない 1) 中動語根アオリスト形について (上の脚注 23 参照)、改新的な形態であるギリシア語 *ε-アオリスト形* *έάγη* は、失われた中動語根アオリスト形 *(f)áγ-ro の代替形であると、Jasanoff (2003: p.160 fn.c) はみなしている。これらの点について、Tanaka (2011: 208–214 and 218–219) の論も参照されたい。

²⁷ このことを敷衍すれば、完了 3 人称単数形 *h₂a-h₂nók-e (あるいは *ō-nāχ-e) と現在中動態 3 人称単数形 *h₂n.k-(t)ói (あるいは *nuχ-(t)ái) が混交することにより、後者の影響で前者の豊音が消失した形 *h₂nók-e (あるいは *nāχ-e) が生じ、完了 3 人称複数形 *h₂a-h₂n.k-ǫs (あるいは *ō-nuχ-ǫr) と現在中動態 3 人称複数形 *h₂n.k-ǫt(ói) (あるいは *nuχ-unpái) が混交することにより、後者の影響で豊音は消失し、前者 (完了形) の単音節語尾の影響を受けて後者の語尾が単音節化した *h₂n.k-ǫt (あるいは *nuχ-ǫn) が生じた。現在中動態 3 人称複数形語尾 *-ǫt(ói) が完了複数形の単音節語尾体系の影響で単音節化して *ǫt となったことについては、Tanaka (2011: 101–103) の論を参照されたい。また、本稿 §4.2 の論に沿って解釈すれば、元の現在中動態 3 人称複数形語尾 *-ǫt(ói) は、完了 3 人称複数形語尾 *-ǫs が有する *-ǫt 構造 (アクセントが置かれた成節的共鳴音とそれに続く阻害音の連鎖) に影響されて、*-ǫt に変化したと考えることもできる。

(5) 過去現在動詞 *ar-「ある」の生成 (Tanaka 2011: 249 参照)

	完了能動形		現在中動形	→	過去現在動詞
3 sg.	*h ₃ o-h ₃ ór-e	>	*a-ar ²⁸		*h ₃ ór-e > *ar
			*h ₃ ŕ-h ₂ ái	>	*ur-a
3 pl.	*h ₃ o-h ₃ ŕ-fs	>	*a-ur-ur		*h ₃ ŕ-ŕt > *ur-un
			*h ₃ ŕ-ŕt(ói)	>	*ur-un(pá)

本稿 §3.2 で論じたように、古英語繫辞 2 人称単数形 (Mercian *earð* など < *ar-*þ*) に残存するこの過去現在動詞の語幹に短母音が生じることを、Schumacher (2005: pp.593-594 §3.1.1) のように、オフトホフの法則による元々の長母音の短化に帰することは妥当ではない。これに対し形態的混交説では、*ar-*þ* 'thou art' の語幹の短母音 *a- の由来を、他の過去現在動詞の由来を説明するのと同じ過程を通じて、説明することができる。

4.2. 強変化動詞 (Tanaka 2009, 2010 の論考と関連して)

Ringe (2006: 157) や Mailhammer (2007: 113f.) が論じるように、印欧祖語からゲルマン語派が分離した後、アオリスト直説法 (aorist indicative) は動詞体系から消失したと考えられる。換言すれば、前ゲルマン祖語の時代に、「過去」を表しうる動詞範疇は完了形と未完了形のみとなっていて、元々表した「相」の違いは解消されたと思われる²⁹。アオリスト直説法の形が動詞体系から失われて、残された完了形と未完了形の双方が互いに形態的に混交して³⁰、ゲルマン語固有の「強変化動詞体系 (strong verb system)」が生じたと考えるのが、本稿での提案である³¹。

²⁸ 成節的な母音 (syllabic vowels) の間にあった喉音は、その後消失して母音接続 (vowel hiatus) を生じさせたと考えられる (Rix 1976: pp.70-71 §81などを参照)。遅くとも、*a.ar という母音接続が縮約によって解消される以前に、現在中動形との形態的混交が生じていて、完了形に元々あった母音 *h₃o- > *a- が消失したと推定される。

²⁹ Ringe (2006: 157): “the perfect indicative and aorist indicative became isofunctional in pre-PGmc., and were therefore in competition. So far as can now be determined, the perfect ‘won out’ completely; there are no plausible reflexes of the aorist indicative at all in any Germanic language. ... During the development of PGmc. from PIE the contrast between imperfective and perfective aspect was lost; in other words, the functional opposition between present and aorist stems broke down.”

³⁰ Ringe (2006: 158) は、ゲルマン語派で唯一残留した印欧祖語の未完了形は、語根 *d^heb₁- ‘put’ から派生したものであると主張しているが、本稿はこの考えとは立場を異にする。*d^heb₁- 以外にもかなりの数の未完了形が前ゲルマン祖語の時代まで受け継がれ、祖語から同様に受け継がれた完了形と混交し、強変化動詞のシステムを生み出したと考えるものである。ゲルマン語派が印欧祖語から分離して間もない頃には、「～した」という瞬時的過去を表し得る動詞範疇としてアオリスト形と完了形のふたつがあったが、アオリスト形が消滅することで、完了形がこの機能を担うことになったと思われる。その一方で、「～していた」という継続的過去は、未完了形によって表されていたと推定できる。このように、完了形と未完了形双方が生産的であった時代が前ゲルマン祖語の時代にはあったと、考えられる。

³¹ ゲルマン語強変化第 V 類動詞過去形 *ē_t- (あるいは *ē_t-) ‘ate’ が加音 (augment) の付いた未完了形 (単数形は *(h₁)e-h₁éd-, 複数形は *(h₁)e-h₁id-) に由来するという Bammesberger (1986: 57) の説について、前ゲルマン祖語に残った未完了形という観点から検討するよう、匿名の査読者のおひとりからコメントをいただいた。しかしながら、本稿では、Bammesberger によるこの説は受け入れない。Mottausch (2000: p.50 §3.2.1) も主張するように、印欧祖語から加音が付いた未完了形がゲルマン語に受け継がれたという独立的な証拠はない。また、Comrie

また本稿では、Kümmel (1998) や Melchert (2014) が提案するように、語根静止 1 型活用を示す、語幹形成母音によらざる語根現在形が、印欧祖語動詞体系では一定程度生産的であったという考えを採用する。Kümmel (1998: 205) は、語根静止 1 型動詞の現在（および未完了形）は、前印欧祖語時代に元々のアオリスト語根（瞬時的行為を意味する語根）に *e*-接中を行った結果生じたもので、当該の *e*-接中辞の機能は「継続化 (Durativierung)」であると考えている³²。語幹形成母音によらざる語根アオリストを形成するアオリスト語根には、同時に語根静止 1 型活用を示す、語幹形成母音によらざる語根現在形をも生じる例が少なくない。LIV² からは、このような語根が 10 個以上存在することが確認できる。この点は、本稿の補遺 (Appendix) 2 を参照されたい。Melchert (2014) は Kümmel (1998) のこの提案を継承しながら、印欧祖語に存在した語根静止 1 型活用を示す語幹形成母音によらざる語根現在形（即ち Narten 現在）は、畳音による現在形 (reduplicating presents) 等に代表される「特徴付けられた現在形 (characterized presents)」の一種であり、アオリスト語根のみならず、現在語根からも形成されることがあったと主張している³³。印欧祖語時代に、現在語根から当該の現在形が形成できたことの証拠として、Melchert (2014: 254f.) はヒッタイト語の *ēzi* ‘sit, be sitting,’ (< PIE **h₁ēs-* beside **h₁es-* ‘be’) と *wēk-* ‘demand’ (< PIE **uek-* beside **uek-* ‘wish, will’) を挙げている³⁴。

前ゲルマン祖語の時代に、元々のアオリスト語根（瞬時的行為を意味する語根）に由来する動詞は完了形を、そして元々の現在語根（継続的行為を意味する語根）に由来する動詞は未完了形を受け継ぎ³⁵、これらふたつの形が混交して強変化過去形を生じたと考えられる。強変化動詞は異なる動詞間での形態的混交により発達し

(1998: 85) などが論じるように、元々過去を表す副詞であった加音を動詞形態に組み込んだのは、インド・イラン語、ギリシア語、アルメニア語、フリギア語に限られ、ゲルマン語はそのような改新を経た言語ではないことに注意したい。**ēt-* ‘ate’ の由来に関する Bammesberger 説の問題点については、Tanaka (2006: p.19 fn.10) や Hogg and Fulk (2011: p.228 §6.34 fn.3) も参照されたい。尚、強変化第 V 類動詞の中で、当該の動詞のみが、過去時制で単数形も複数形も長母音を示す語幹 **ēt-* を示すことについては、本稿では未解決の問題とし、別稿にて論じることにする。

³² Kümmel (1998: 205): “Hauptfunktion des akroodynamischen Wurzelpräsens also die Durativierung gewesen sei. [Kümmel’s fn. 50:] Vielleicht haben wir es tatsächlich eher mit einem **e*-Infix zu tun als mit einer Dehnung; Vokaldehnung kann für die frühe Grundsprache, in der Langvokale selten waren, jedenfalls nicht bedenkenlos angenommen werden.”

³³ Melchert (2014: 253): “... if the acrostatic present truly is a *root* present, there should not exist a PIE root aorist to the same root, not a competing characterized present formation. The alternative is to regard acrostatic presents as *characterized* presents, entirely parallel to suffixed types like those in **ske/o-* or reduplicated presents, but marked by a special accent and ablaut pattern.” *Op.cit.* p.256: “I ... must reject the notion of special ‘Narten roots’ that formed true root presents (*functionally* equivalent to ordinary root presents) with ‘upgraded’ ablaut. Acrostatic presents rather formed characterized presents in the same manner as various suffixes or reduplication.”

³⁴ **h₁es-* ‘be’ と **uek-* ‘wish, will’ は、印欧祖語で語幹形成母音によらざる語根現在形を形成した動詞語根であり、代表的な現在語根と考えられている。LIV² (241f. and 672f.) などを参照。

³⁵ 印欧祖語の動詞語根が、アオリスト語根と現在語根の 2 つに大別できることについては、Jasanoff (2003: pp.150–151 fn. 13), Mailhammer (2007: 23f.) などを参照されたい。

たとするもので、強変化動詞の数が過去現在動詞の数よりも多いことの説明となる（詳細は Tanaka 2010: 11–12 参照）。

このことに加え、上に記したように、印欧諸語からの経験的証拠によって、印欧祖語で語根静止 1 型の (acrostatic 1 = Narten) ³⁶ 現在形を形成できた動词语根、および語根語尾移動型の (amphikinetic) ³⁷ 現在形を形成できた動词语根があったと、判断できる。前者の例として **b^her-* ‘carry’ (3. sg. **b^hér-t* ‘(s)he was carrying’, 3. pl. **b^hér-nt* ‘they were carrying’)³⁸ や **nes-* ‘come back’ (3. sg. **nés-t* ‘(s)he was coming back’, 3. pl. **nés-nt* ‘they were coming back’)³⁹ などが挙げられ (Tanaka 2009: 16; 2010: 12 参照)。後者の例として **sker-* ‘shear’ (3. sg. **skér-t* ‘(s)he was shearing’, 3. pl. **skér-ént* ‘they were shearing’) や **les-* ‘collect’ (3. sg. **lés-t* ‘(s)he was collecting’, 3. pl. **lés-ént* ‘they were collecting’) などが

³⁶ 語根静止 1 型 (acrostatic 1) あるいはナルテン型 (Narten) と呼ばれる活用パターンは、強形では延長階梯母音を持つ語根にアクセントが置かれ、弱形では盈階梯母音を持つ語根にアクセントが置かれるのが特徴である (Clackson 2007: 80 などのハンドブックを参照)。Narten (1968: 18f.) は、インド・イラン祖語に次に示す動詞活用を再建しており、これは印欧祖語の **stéu-*/*stéu-* ‘praise’ を受け継いだものだと論じている。

直説法能動態 単数形 **stáumi*, **stáusi*, **stáuti*

複数形 **stáumasi*, **stáutha*, **stáyati*

能動分詞 **stáyat*

直説法中動態 単数形 **stáyai*, **stáusai*, **stáyai* (**stáutai*)

複数形 **stáumadhai*, **stáudhyai*, **stáyatai*

中動分詞 **stáyāna-*

³⁷ 語根語尾移動型 (amphikinetic) と呼ばれる活用パターンの特徴は、強形では盈階梯母音を持つ語根にアクセントが置かれて語尾にはアクセントが置かれず、弱形ではアクセントが置かれないうゼロ階梯母音を持つ語根にアクセントのある盈階梯母音を持つ語尾が続くことである。ここで論じる動詞は語根動詞であり、接尾辞 (suffix) そのものがゼロである形態を取る。この種の動詞も本稿では「語根語尾移動型」に含めることにする。ただし、Clackson (2007: 80) では、接尾辞がゼロ (即ち存在しない) タイプを、移動型 (the kinetic type) として個別の範疇としている。

³⁸ ラテン語の *ferō* ‘carry’ は、2 人称現在に *fers* ‘you carry’, 3 人称現在に *fert* ‘(s)he carries’ という、語幹形成母音によらざる語根現在形を示す。これは、印欧祖語で動詞 **b^her-* ‘carry’ が、語根静止 1 型の (語幹形成母音によらざる) 現在形という古形 (2 sg. **b^hér-si* and 3 sg. **b^hér-ti*) を保つとともに、語幹形成母音による現在形 (thematic present) **b^hér-oh₂* も発達させていたことを反映するものであると、理解できる。(ラテン語の *fers*, *fert* における語根の母音は、オストホフの法則が適用したため、短化したと考えられる。) 関連した議論には、Jasanoff (1998; 2003: 224ff.), Svensson (2012–2013: 48f.) などがある。動詞 **b^her-* の例と同様に、ゲルマン語強変化 IV 類に属する動詞では、**nem-* ‘take’ が、印欧祖語で語根静止 1 型の (語幹形成母音によらざる) 現在形や未完了形 (3 sg. **ném-t(i)*) を形成した可能性がある (Svensson 2012–2013: 51 を参照)。Mailhammer (2007: 221) が示すように、ゲルマン祖語に再建できる強変化 IV 類動詞は僅か 10 例であり、他のクラスの強変化動詞に比べ、その数が顕著に少ない。これらの例のうち、少なくとも 2 つ (3 sg. **b^hér-t* ‘(s)he was carrying’ and **ném-t* ‘(s)he was taking’) が、前ゲルマン祖語の時代まで語根静止 1 型の (語幹形成母音によらざる) 未完了形を残していたとすれば、以下本文で論じるような形態的混交が可能であったと考えられる。

³⁹ 印欧祖語において語根静止 1 型現在形 **nés-ti* ‘(s)he comes or is coming back’ が語幹形成母音による現在形 **nés-e/o-* ‘come back’ と並んで存在していた証拠として、Jasanoff (2003: 224) は古アイスランド語使役形 *nóra* ‘revive’, トカラ語 A 分詞 *nāmtsu* (< **nānasu* < **nōs-*) ‘been’, 及びトカラ語の現在形 A *nas-*, B *nes-* (< **nés-*) ‘be’ を挙げている。Malzahn (2007) や Svensson (2012–2013: 49) の論考も、参照されたい。

挙げられる (LIV² 2001: 413f., 556f., and 711 および Tanaka 2010: 13 参照)。

さて、元々語根静止 1 型の (語幹形成母音によらざる) 現在形や未完了形を形成した動詞では、前ゲルマン祖語の時代にはその強形をパラダイム全体で一般化したと考えられる (i.e. pre-PGmc. 3. sg. **b^hér-t* '(s)he was carrying' and 3. pl. **b^hér-ŋt* ← PIE **b^hér-ŋt* 'they were carrying'; 3. sg. **nés-t* '(s)he was coming back' and 3. pl. **nés-ŋt* ← PIE **nés-ŋt* 'they were coming back'; cf. Tanaka 2009: 16)。換言すれば、直説法能動態に関して元々単数形に限られていた語根に長母音を示す形態が、単数形以外でも一般化されたと思われる⁴⁰。

前ゲルマン祖語の時代に、2つの異なる形態的混交パターンにより、2つの異なる (強変化 IV, V 類) 過去複数形が生じたと考えられる。即ち、完了形と語根静止 1 型の未完了形との混交と、完了形と語根語尾移動型の未完了形との混交である。前者からは延長階梯母音を含む過去複数形が生じ、後者からはゼロ階梯母音を反映する過去複数形が生じたと思われる。

(6) 完了形と語根静止 1 型の未完了形との混交 (Tanaka 2010: 12 より)

a.	完了形	強変化 IV 類過去形	未完了形	強変化 IV 類過去形
	'shattered'	→ 'shattered,	'was/were	→ 'carried,
		was/were shattering'	carrying'	was/were carrying'
	3 sg. * <i>de-dór-e</i>	→ * <i>dór-e</i>	* <i>b^hér-t</i>	→ * <i>b^hór-e</i>
	3 pl. * <i>de-dŕ-ŋs</i>	→ * <i>dēr-ŋt</i>	* <i>b^hér-ŋt</i> (continuing into PGmc. * <i>bār-un</i>)	
b.	完了形	強変化 V 類過去形	未完了形	強変化 V 類過去形
	'fell asleep' ⁴¹	→ 'fell asleep,	'was/were	→ 'came back,
		was/were sleeping'	coming back'	was/were coming back'
	3 sg. * <i>se-suóp-e</i>	→ * <i>suóp-e</i>	* <i>nés-t</i>	→ * <i>nós-e</i>
	3 pl. * <i>se-sup-ŋs</i>	→ * <i>suép-ŋt</i>	* <i>nés-ŋt</i> (continuing into PGmc. * <i>nās-un</i>)	

⁴⁰ ラテン語の *s-*完了形 (*s*-perfect) でも、同様の延長階梯母音の一般化が生じている (e.g. PIE *s*-aor. **uēǵ^h-s*/**uēǵ^h-s-* → pre-Lat. **uēk-s*/**uēk-s-* > Lat. *vēxi, vēxere* 'I, they (have) conveyed'; cf. LIV² 2001: 661; Weiss 2009: 412; Gotō 2013: 113)。ゲルマン語内での類例を挙げれば、語根名詞 **fōt-* 'foot' は、元々印欧祖語では単数主格に限られていた延長階梯母音を持つ語幹形 (PIE **pōd-*) をパラダイム全体で一般化した (Campbell 1959: p.39 §102 fn.3; Bammesberger 1990: 23; 田中 2013b: 5 などを参照)。

⁴¹ Klingenschmitt (1978) は、主に古インド語の対応動詞形に基づいて、この語根が印欧祖語で語根静止 1 型の現在形 **suépti/suépnti* を構築していたと論じている。しかしながら、この論は疑う余地がある。Jamison (1982-1983) による Klingenschmitt 説への批判 (および代案) を参照。Barton (1985: 18) も主張するように、印欧祖語では **ses-*「眠っている」が継続的語彙アスペクトを表すのに対し、**suép-*「寝入る」は瞬時的語彙アスペクトを表したと考えられる。これに対して、近年 Jasanoff (2012: 129) は Klingenschmitt の説を支持する見解を表明している。語幹形成母音によらざる語根アオリスト (athematic root aorist) および完了形を形成する語根が、同時に語根静止 1 型の語幹形成母音によらざる語根現在 (athematic root present) を形成する例は珍しくない (Jasanoff 2003: p.151 fn.13; Tanaka 2011: 175-176 参照) ため、印欧祖語 **suép-* もそのような語根だった可能性が残る。類例は、本稿の補遺 (Appendix) 2 を参照のこと。

(6) に示す形態的混交において、元の未完了単数形は、元の完了単数形に影響されて、*o*-階梯母音を反映する語根と完了形固有の語尾を持つことになる (3 sg. **b^hór-e* および **nós-e*)。また元の完了単数形は、元の未完了単数形に影響されて、その暈音を失っている (3 sg. **dór-e* および **suóp-e*)。その一方で、元の完了複数形は、元の未完了複数形に影響されて、暈音を失い、延長階梯母音を反映する語根と語尾 **-ŋt* を持つことになる (3 pl. **dér-ŋt* および **suép-ŋt*)。元来の形態をゲルマン祖語 (およびその後の段階) に至るまで受け継ぐことになったのが、元の未完了複数形である (**b^hér-ŋt* および **nés-ŋt*)。

(7) 完了形と語根語尾移動型の未完了形との混交 (Tanaka 2010: 13 より)

a.	完了形	強変化 IV 類過去形	未完了形	強変化 IV 類過去形
	‘shattered’	→ ‘shattered, was/were shattering’	‘was/were shearing’	→ ‘shore’ was/were shearing’
	3 sg. <i>*de-dór-e</i>	→ <i>*dór-e</i>	<i>*skér-t</i>	→ <i>*skór-e</i>
	3 pl. <i>*de-dŕ-ŋs</i>	→ <i>*dŕ-ŋt</i>	<i>*skr-ént</i>	→ <i>*skŕ-ŋt</i>
b.	完了形	強変化 V 類過去形	未完了形	強変化 V 類過去形
	‘fell asleep’	→ ‘fell asleep, was/were asleep’	‘was/were collecting’	→ ‘collected’ was/were collecting’
	3 sg. <i>*se-suóp-e</i>	→ <i>*suóp-e</i>	<i>*lés-t</i>	→ <i>*lós-e</i>
	3 pl. <i>*se-sup-ŋs</i>	→ <i>*sup-ŋt</i>	<i>*ls-ént</i>	→ <i>*ls-ŋt</i>

(7) に示した形態的混交では、元の未完了単数形は、元の完了単数形に影響されて、*o*-階梯母音を反映する語根と完了形固有の語尾を持つことになる (3 sg. **skór-e* および **lós-e*)。また元の完了単数形は、元の未完了単数形に影響されて、その暈音を失っている (3 sg. **dór-e* および **suóp-e*)。その一方で、元の完了3人称複数形は、元の未完了3人称複数形に影響されて、暈音を失い、語尾 **-ŋs* と類似した **-ŋt* を持つことになる (3 pl. **dŕ-ŋt* および **sup-ŋt*)。元の未完了3人称複数形は、完了3人称複数形語尾 **-ŋs* に影響されて、その語尾 **-ént* を **-ŋt* に変化させている (即ち、**-ŕT* 型の語尾に変化させている；**skŕ-ŋt* および **ls-ŋt*)。

強変化過去形は対応する (語幹形成母音による) 現在形との最適な形態的差異を成す必要があった (Matzel 1970: 178-179; Mottausch 2000: 52-53; Schumacher 2005: 597; Mailhammer 2007: 97; 田中 2013a: § 3.3 および § 4.4 などを参照)。強変化動詞の現在形 (即ち語幹形成母音による現在形) の語根は通常 *e*-階梯であり⁴²、それとの最適な形態的差異は、質の違いしか成さない PGmc. **-u-* よりも量的な差異を成す PGmc. **-ǣ-* だと感じられたと思われる。この結果、複数形において pre-PGmc.

42 「アオリスト現在形 (aorist-present)」と呼ばれる現在形は例外であり、ゼロ階梯の語根形を取る (Prokosch 1939: 149-151; Campbell 1959: 303 などを参照)。Matzel (1970: 178) も指摘する通り、強変化第 IV 類に属するアオリスト現在形 (語根の形状は **-u-*) との差異を成すためにも、過去形では **-u-* を語根に示す形状は容認され得なかったと言える。

*-ē- > PGmc. *-ē- がすべての強変化 IV, V 類動詞の過去複数形に一般化されたと考えられる (i.e. *skj-ŋt → *skēr-ŋt, *ls-ŋt → *lēs-ŋt by analogy with *b^hēr-ŋt and *nēs-ŋt) 43。このように長母音を語根に一般化すると同時に、強変化 IV, V 類動詞の過去複数形は、元々の異なるアクセントの位置 ((6) のように語根にアクセントが置かれる例と (7) のように語尾にアクセントが置かれる例) を、双方の形で保つように混交したと思われる。換言すれば、それぞれの過去複数形が、語根にアクセントを置く形と語尾にアクセントを置く形双方を、ヴェルナーの法則が適用される前の時代に、形成するようになっていたと考えられる (i.e. *skj-ŋt → *skēr-ŋt as well as *skér-ŋt, *ls-ŋt → *lēs-ŋt as well as *lēs-ŋt; *b^hēr-ŋt with an innovative *b^hér-ŋt, and *nēs-ŋt with an innovative *nēs-ŋt)。過去複数形において、これらの2つの異なるアクセント位置を持つ異形態が生じたプロセスを論じたものとして、田中 (2013b) も参照されたい。

4.3. まとめ：形態的混交説の立場から説明できること

本節では形態的混交説に基づき、次の2つのことを論じた。1) 過去現在動詞 IV, V 類現在複数形のゼロ階梯語根は、元々の完了複数形および語幹形成母音によらざる中動複数形のゼロ階梯語根を継承したものだと考えられる。2) 強変化動詞 IV, V 類過去複数形の延長階梯語根は、元々の語根静止 1 型の (語幹形成母音によらざる) 未完了形を継承したのだと理解できる。

5. 結論および残された問題

本稿では、Schumacher (2005) の論考も含めて従来の「完了形のみからの発達」とする見解では、過去現在動詞 IV, V 類の現在複数形 (語根がゼロ階梯を反映する) と強変化動詞 IV, V 類過去複数形 (語根が延長階梯を反映する) との形態的差異を説明できないことを論じた。他方、形態的混交説 (morphological conflation theory) の立場から、過去現在動詞の現在形は完了能動形と語幹形成母音によらざる現在中動形との混交から発達し、強変化動詞の過去形は完了能動形と語幹形成母音によらざる未完了能動形との混交から発達したという図式によって、それらの形態的差異が説明できるということを示した。

本稿では十分に考察できなかった、残された問題もある。それは、Schumacher (2005) の論考も含めた従来の「完了形のみからの発達」とする見解では、容易に説明がつかない現象であり、強変化 V 類動詞過去複数形に散発的に見られる語根末摩擦音の有声化 (即ち Verner's law effect; 田中 2013a: § § 3.6 and 4.3 参照) がなぜ生じたのかという問題である (下の補遺 1 を参照されたい)。形態的混交説の立

43 従来は、強変化第 IV 類過去複数形語幹に生じる長母音は、強変化第 V 類の過去複数形とのアナロジーによってもたらされたという仮定がなされていた (Mailhammer 2007: p.67 §3.1.8 に挙げられた文献、並びに Jasanoff 2012: 127 を参照)。本稿の提案はこの見解とは異なり、強変化 IV 類、V 類とも、同様の形態的混交過程を経て、前ゲルマン祖語時代に生成されたと考えるものである。上の脚注 38 も参照。

場からこれがどのように説明できるかについては、田中（2013b）の議論がある。

補遺 (Appendix) 1: 強変化 V 類動詞過去複数形に見られる散発的な語根末無声摩擦音の有声化 (田中 2013a: 106–108; 2013b: 16–17 参照)

A.1. ゴート語以外はすべてヴェルナーの法則の適用が見られる例

(1) **wesana*ⁿ ‘stay, be’; cf. Seebold (1970: 561) as well as Prokosch (1939: 172)

	Inf.	pret. sg.	pret. pl.	pret. part.
Go.	wisan	was	wesun	undocumented
ON	vesa, vera	vas, var	vǫrom	verenn, vesenn
OE	wesan	wæs	wæron	-weren, -woren ⁴⁴
OFris.	we(i)sa	was	wēron	wesen
OS	wesan	was	wārun	undocumented
OHG	wesan	was	wārun, -wās ⁴⁵	-weran ⁴⁶

A.2. ゴート語以外の複数のゲルマン語においてヴェルナーの法則適用が見られる例

(2) **seχ^wana*ⁿ ‘see’; cf. Seebold (1970: 387):

	Inf.	pret. sg.	pret. pl.	pret. part.
Go.	saiḥvan	sahv	sehun	saiḥvans
ON	sjá	sá	sǫm, sóm (ságom)	sénn
OE	sēon	seah, seag	sāwon, sāgon	sewen, sēn, segen
OFris.	sia	sach	sēgon	sien, sēn
OS	sehan	sah	sāwun, sāun, sāhun	sewan, sehan, seen
OHG	seh(h)an	sah	sāhun ⁴⁷	gi-sewan, gi-sehan ⁴⁸

⁴⁴ *decrepita* ‘old, decrepit’ の注釈として *forweren, forworen* が文証されている (Seebold 1966: 8 参照)。

⁴⁵ 単体動詞 (simplex verb) *wesan* ‘stay, be’ については、古高ドイツ語の文献には **wāsun* のような過去複数形は、文証されていない。しかしながら、複合動詞 (complex verb) *fir-wesan* ‘represent’ において、Otfrid では *fir-wās-* という音形の過去複数形 (接続法過去単数 *fir-wās-i*, 複数 *fir-wās-in* ‘would represent’; cf. Franck 1909: p.236 §186; Braune and Reiffenstein 2004: p.284 §343 Note 2 and Seebold 2008: p.938 s.v. *fir-wesan*) が現れている。

⁴⁶ 複合動詞 *ir-wesan* ‘confectus’ or ‘abgezehrt’ の過去分詞が文証されている (Braune and Reiffenstein 2004: p.284 §343 Note 2; Seebold 2008: p.939 s.v. *ir-wesan* 参照)。

⁴⁷ Seebold (1970: 387) では、ヴェルナーの法則が適用された過去複数形 **sāgun* が古高ドイツ語で文証されることが示唆されているが、Kali-Korpus (s.v. *sehan*) では、語根末摩擦音が有声音となる例は挙げられていない。

⁴⁸ 過去分詞において、語根末に有声音 *-w-* を示す形と、無声音 *-h-* を示す形双方が文証されることについては、Braune and Reiffenstein (2004: p.285 §343 Note 4) を参照。

(3) **kweþana*ⁿ ‘say’; cf. Seebold (1970: 318f.):

	Inf.	pret. sg.	pret. pl.	pret. part.
Go.	qīþan	qaþ	qeþun	qīþans
ON	kveða	kvað, kvat, kvad, kóð	kvǫðom, kóðom	kveðenn
OE	cweðan	cwæð	cwædon	cweden
OFris.	quetha	queth	quēthon	quethen
OS	quethan, quedan	quath, quad	quādun, quāthun	-quedan, -quethan
OHG	quedan chedan, chodan	quad, quat	quādun, quātun ⁴⁹	gi-quetan, gi-quedan ⁵⁰

A.3. 古高ドイツ語のみに於いてヴェルナーの法則適用が見られる例

(4) **lesana*ⁿ ‘collect, gather’; cf. Seebold (1970: 332):

	Inf.	pret. sg.	pret. pl.	pret. part.
Go.	lisan	undocumented	lesun	lisans
ON	lesa	las	lǫsom	lesenn
OE	lesan	læs	læson	lesen
OFris.	lesa	les	undocumented	ge-lesen, ge-leren
OS	lesan	las	lāsun	gi-lesan
OHG	lesan	las	lārūn, lāsūn ⁵¹	gi-leran, gi-lesan ⁵²

⁴⁹ この過去複数形に関しては、8世紀の Isidor には *-d-* (< WGmc. **-þ-*) を示す形態が生じ、9世紀初期の Monsee-Wiener Fragmente には *-t-* (< WGmc. **-d-*) を示す形態が見られる (Seebold 1970: 319 参照)。更には、9世紀中頃の Tatian では、一様に *-d-* (< WGmc. **-þ-*) を示す形態が生じ (Prokosch 1939: 184; Braune and Reiffenstein 2004: p.284 note 3)、9世紀後期の Otfrid では *-d-* (< WGmc. **-þ-*) と *-t-* (< WGmc. **-d-*) の双方の形態が現れるが、前者の方がより一般的である (Prokosch 1939: 184; Seebold 1970: 319; Braune and Reiffenstein 2004: p.284 note 3)。古高ドイツ語の最初期の時代には、ヴェルナーの法則による無声摩擦音の有声化を受けていない形が文証されているという事実は、本稿の議論にとって重要である。即ち、強変化 V 類動詞の過去複数形の有声摩擦音が通時的に均一化されて無声摩擦音に変化したのではなく、ゲルマン祖語には元々有声化を受けていない形および有声化を受けた形の双方が存在したという見解を支持する、経験的証拠となっていると考えられる。これに関連した論として、田中 (2013b: 14–15) がある。

⁵⁰ 過去分詞において、語根末に元々の有声音を示す *-t-* (< WGmc. **-d-*) を持つ形と、元々の無声音を示す *-d-* (< WGmc. **-þ-*) を持つ形双方が文証されることについては、Braune and Reiffenstein (2004: p.284 §343 Note 3) を参照。

⁵¹ 当該の過去複数形は、9世紀初期の Monsee Fragmente に有声の *-r-* (< PGmc. **-z-*) の形が見られる一方、9世紀中頃の Tatian や 9世紀後期の Otfrid では無声の *-s-* (< PGmc. **-z-*) の形が見られる。Glosses I, 471, 5 (Steinmeyer and Sievers 1879: 471) にも、語根末に有声音を示す *larun* (*lār-un*; 3 pl. pret. ind.) が記録されている。Seebold (1970: 332) を参照。

⁵² 過去分詞において、語根末に元々の有声音を示す *-r-* (< PGmc. **-z-*) を持つ形と、元々の無声音を示す *-s-* (< PGmc. **-z-*) を持つ形双方が、古高ドイツ語期の間に文証されることについては、Braune and Reiffenstein (2004: p.284 §343 Note 2) を参照。

(5) *nesanaⁿ ‘come back’; cf. Seebold (1970: 359):

	Inf.	pret. sg.	pret. pl.	pret. part.
Go.	-nisan	-nas	-nesun	undocumented
OE	nesan	næs	nāson	nesen
OS	-nesan	-nas	undocumented	undocumented
OHG	-nesan	-nas	-nārun ⁵³	-neran, -nesan ⁵⁴

A.4. 両義的な例

(6) *swefanaⁿ ‘sleep’; cf. Seebold (1970: 482):

	Inf.	pret. sg.	pret. pl.	pret. part.
ON	sofa	svaf	svófom, sófom	sofenn
OE	swefan	swæf	swæfon	undocumented

補遺 (Appendix) 2: LIV² による, 印欧祖語における語根アオリスト (root aorist) と対応する語根静止型 1 活用を呈する語根現在形 (acrostatic 1 root present) 双方を取る動詞語根の例 (Tanaka 2011: 176 を参照) ⁵⁵

- root aor. *dék-/d.k̄- vs. pres. *dék-/dék- beside *d.k̄-néu/nu-, cf. LIV² (pp.109ff. s.v. *dék- ‘(an-, auf-)nehmen, wahrnehmen’); LIV² p.110 note 3 assigns the iterative-durative meaning ‘stetig wahrnehmen’ = ‘Anschau halten, erwarten’ to the Narten present.
- root aor. *h₁éd-/h₁d-⁵⁶ vs. pres. *h₁éd-/h₁éd-, cf. *op. cit.* pp.230f. *h₁ed- ‘(beißen →) essen’; p.230 note 3 allocates the originally iterative-durative meaning ‘bite repeatedly’ → ‘eat’ to the Narten present.
- root aor. k̄éHs-/k̄éHs- vs. pres. *k̄éHs-/k̄éHs-, cf. *op. cit.* pp.318f. s.v. *k̄éHs- ‘anweisen’
- root aor. *k̄rémb₂-/k̄rmb₂- vs. pres. *k̄rémb₂-/k̄rémb₂- beside *k̄r̄m-né/ŋ-h₂-, cf. *op. cit.* pp.337f. s.v. *k̄remb₂- ‘schlaff werden’
- root aor. *k̄ém-/k̄m- vs. pres. *k̄ém-/k̄ém-, cf. *op. cit.* pp.389f. s.v. *k̄ém- ‘(hinunter) schlucken, einsaugen’
- root aor. *k̄^uéu-/k̄^uéu- vs. pres. *k̄^uéu-/k̄^uéu-, cf. *op. cit.* pp.394f. s.v. *k̄^uéu- ‘sich in Bewegung setzen’

⁵³ Glosses I, 609, 62 に *ginari* (*gi-nār-i*; 3 sg. pret. subj.) という, ヴェルナーの法則適用による有声摩擦音を語根末に持つ形が文証される (Steinmeyer and Sievers 1879: 609)。Seebold (1970: 359) が示唆する, *-nās-un という無声摩擦音を語根末に示す過去複数形は, Kali-Korpus (s.v. *ginesan*) では見出せない。

⁵⁴ 過去分詞において, 語根末に元々の有声音を示す -r- (< PGmc. *-z-) を持つ形と, 元々の無声音を示す -s- (< PGmc. *-s-) を持つ形双方が, 古高ドイツ語期の間に文証されることについては, Braune and Reiffenstein (2004: p.284 §343 Note 2) を参照。

⁵⁵ このリストでは, LIV² 2001 が語根アオリスト形またはナルテン型の現在形に疑問符を付した例を, 除外している。類似した一覧表として, Kümmel (1998: 204f.) も見られたい。

⁵⁶ LIV² (2001: p.230, note 2) は, 印欧祖語の *h₁d-ónt- ‘tooth’ が語根アオリスト形から派生したとみなしている。

- g. root aor. **lējH-/liH-* vs. pres. **lējH-/lējH-*, cf. *op. cit.* pp.405f. s.v. 2 **leiH-* ‘gießen’
- h. root aor. **lēuH-/luH-* vs. pres. **lēuH-/lēuH-* beside **lu-né/n-H-* and **luH-é-*, cf. *op. cit.* p.417 s.v. **leuH-* ‘abschneiden, lösen’
- i. root aor. **séik-/sik-* vs. pres. **séik-/séik-* beside **sik-néu/nu-*, cf. *op. cit.* pp.522 s.v. **seik-* ‘erreichen’
- j. root aor. **sékH-/skH-* vs. pres. **sékH-/sékH-* beside **skH-jé-*, cf. *op. cit.* p.524 s.v. **sekH-* ‘abtrennen’
- k. root aor. **tétk-/tatk-* vs. pres. **tétk-/tétk-*, cf. *op. cit.* pp.638f. s.v. **tetk-* ‘erzeugen, herstellen’
- l. root aor. **uéd^hh₁-/ud^hh₁-* vs. pres. **uéd^hh₁-/uéd^hh₁-*, cf. *op. cit.* p.660 s.v. **ued^hh₁-* ‘stoßen’
- m. root aor. **uélb₁-/ulb₁-* vs. pres. **uélb₁-/uélb₁-*, cf. *op. cit.* pp.677f. s.v. **uelb₁-* ‘(aus)wählen’

参 照 文 献

- Adams, Douglas Q. (comp.) (1999) *A dictionary of Tocharian B*. Amsterdam: Rodopi.
- Adams, Douglas Q. (comp.) (2013) *A dictionary of Tocharian B*, 2nd edition, 2 volumes. Amsterdam: Rodopi.
- Armitage, Lionel (1911) *An introduction to the study of Old High German*. Oxford: Clarendon.
- Bammesberger, Alfred (1986) *Der Aufbau des germanischen Velbalsystems*. Heidelberg: Winter.
- Bammesberger, Alfred (1990) *Die Morphologie des urgermanische Nomens*. Heidelberg: Winter.
- Barton, Charles (1985) PIE **suep-* and **ses-*. *Die Sprache* 31: 17–39.
- Birkmann, Thomas (1987) *Präteritopräsentia: Morphologische Entwicklung einer Sonderklasse in den altgermanischen Sprachen*. Tübingen: Niemeyer.
- Braune, Wilhelm and Ingo Reiffenstein (2004) *Althochdeutsche Grammatik* vol. 1: *Laut- und Formenlehre*, 15th edition. Tübingen: Niemeyer.
- Brunner, Karl (1965) *Altenglische Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.
- Campbell, Alistair (1959) *Old English grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Clackson, James (2007) *Indo-European linguistics: An introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Comrie, Bernard (1998) The Indo-European linguistic family: Genetic and typological perspectives. In: Ramat, Anna Giacalone and Paolo Ramat (eds.) *The Indo-European languages*, 74–97. London: Routledge.
- Cowgill, Warren (1960) Gothic *iddja* and Old English *ēode*. *Language* 36: 483–501.
- Fortson IV, Benjamin W. (2010) *Indo-European language and culture: An introduction*, 2nd edition. Oxford: Blackwell.
- Franck, Johannes (1909) *Altfränkische Grammatik, Laut- und Flexionslehre*. Göttingen: Vandenhoeck and Ruprecht. [2nd edition 1971]
- Frotscher, Michael (2014) Review: Tanaka, Toshiya. *A morphological conflation approach to the historical development of preterite-present verbs: Old English, Proto-Germanic, and Proto-Indo-European*. The faculty of languages and cultures library, Kyushu University 2. Fukuoka: Hana-Shoin. 2011. *International journal of diachronic linguistics and linguistic reconstruction* 11, 67–78.
- García Ramón, José Luis (1999) Zur Bedeutung indogermanischer Verbalwurzeln: **b₂nek-* ‘erreichen, reichen bis’, **b₁nek-* ‘erhalten, (weg)nehmen’. In: Habisreitering, Jürgen, Robert Plath and Sabine Ziegler (eds.) *gering und doch Herzen: 25 indogermanische Beiträge Bernhard Forssman zum 65. Geburtstag*, 47–80. Wiesbaden: Reichert.
- Gotō, Toshifumi (2013) *Indo-Aryan morphology and its Indo-Iranian background*. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Hogg, Richard M. and R. D. Fulk (2011) *A grammar of Old English*, Vol. 2: *Morphology*. Oxford: Wiley-Blackwell.

- IEW = Pokorny Julius (comp.) (1959) *Indogermanisches etymologisches Wörterbuch*, 2 vols. Bern: Francke.
- Jamison, Stephanie W. (1982–1983) “Sleep” in Vedic and Indo-European. *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung* 96: 6–16.
- Jasanoff, Jay H. (1994) Germanic. In: Bader, Françoise (ed.) *Langues indo-européennes*, 251–280. Paris: CNR.
- Jasanoff, Jay H. (1998) The thematic conjugation revisited. In: Jasanoff, Jay, Melchert, H. Craig and Oliver, Lisi (eds.) *Mír curad: Studies presented to Calvert Watkins*, 301–316. Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck.
- Jasanoff, Jay H. (2003) *Hittite and the Indo-European verb*. Oxford: Oxford University Press.
- Jasanoff, Jay H. (2012) Long-vowel preterites in Indo-European. In: Melchert, H. Craig (ed.) *The Indo-European verb: Proceedings of the society for Indo-European studies, Los Angeles 13–15 September 2010*, 127–135. Wiesbaden: Reichert.
- Kim, Ronald I. (2012) Review: Tanaka, Toshiya. *A morphological conflation approach to the historical development of preterite-present verbs: Old English, Proto-Germanic, and Proto-Indo-European*. The faculty of languages and culture library, Kyushu University 2. Fukuoka: Hana-Shoin, 2011. *Kratylos* 57: 204–208.
- Klingenschmitt, Gert (1978) Zum Ablaut des indogermanischen Kausativs. *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung* 92: 1–13.
- Klingenschmitt, Gert (1982) *Das altarmenische Verbum*. Wiesbaden: Reichert.
- Krahe, Hans and Wolfgang Meid (1969) *Germanische Sprachwissenschaft*, 7th edition, 3 vols. Berlin: Walter de Gruyter.
- Kümmel, Martin Joachim (1998) Wurzelpresens neben Wurzelarist im Indogermanischen. *Historische Sprachforschung* 111: 191–208.
- Kümmel, Martin Joachim (2000) *Das Perfekt im Indoiranischen*. Wiesbaden: Reichert.
- Kümmel, Martin Joachim (2017) *Addenda und Corrigenda zu LIV²*. http://www.oriindufa.uni-jena.de/iskvomeia/indogermanistik/K%C3%BCmmel_liv2_add.pdf [2017年2月19日版: 同年3月15日閲覧]
- Kurylowicz, Jerzy (1956) *L'apophonie en indo-européen*. Wrocław: Zakład imienia Ossolińskich.
- Kurylowicz, Jerzy (1968) *Indogermanische Grammatik*, Vol. II: *Akzent, Ablaut*. Heiderberg: Winter.
- LIV² = Rix, Helmut, Kümmel, Martin, Zehnder, Thomas, Lipp, Reiner and Schirmer, Brigitte (comp.) (2001) *Lexikon der indogermanischen Verben: Die Wurzeln und ihre Primärstammbildungen*, 2nd edition. Wiesbaden: Reichert.
- Lubotsky, Alexander M. (comp.) (1997) *A R̥gvedic word concordance*, 2 vols. New Haven: American Oriental Society.
- Macdonell, Arthur Anthony (1910) *Vedic grammar*. Straßburg: Trübner.
- Mailhammer, Robert (2007) *The Germanic strong verbs: Foundations and development of a new system*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Malzahn, Melanie (2007) Tocharian desire. In: Nussbaum A. J. (ed.) *Verba docenti: Studies in historical and Indo-European linguistics presented to Jay H. Jasanoff by students, colleagues, and friends*, 237–249. Ann Arbor and New York: Beech Stave.
- Matzel, Klaus (1970) Zum System der starken Verben des Germanischen. In: Tilakasiri, J. (ed.) *Anjali, papers on Indology and Buddhism: A felicitation volume presented to Oliver Hector de Alwis Wijesekera on his sixtieth birthday*, 173–181. Peradeniya: The Felicitation Volume Editorial Committee, University of Ceylon.
- Melchert, Craig H. (2014) “Narten formations” versus “Narten roots”. *Indogermanische Forschungen* 119: 251–258.
- Mottausch, Karl-Heinz (2000) Das Präteritum der 4. und 5. starken Verbklassen im Germanischen. *North-western European language evolution* 36: 45–58.
- Narten, Johanna (1968) Zum “proterodynamischen” Wurzelpresens. In: Heesterman, J. C., G. H. Schokker and V. L. Subramoniam (eds.) *Pratidānam: Indian, Iranian and Indo-European studies presented to Franciscus Bernardus Kuiper on his sixtieth birthday*, 9–19. The Hague: Mouton.
- Peyrot, Michaël (2010) On the formation of the Tocharian preterite participles. *Historische Sprachforschungen* 121: 69–83.

- Pike, Moss (2009) The Indo-European long-vowel preterite: New Latin evidence. In: Rasmussen, Jens Elmegård and Olander, Thomas (eds.) *Internal reconstruction in Indo-European, methods, results, and problems: Section papers from the XVI international conference on historical linguistics, University of Copenhagen, 11th–15th August, 2003*, 205–212. Copenhagen: Museum Tusulanum.
- Prokosch, Eduard (1939) *A comparative Germanic grammar*. Philadelphia: Linguistic society of America.
- Randall, William and Howard Jones (2015) On the early origins of the Germanic preterite presents. *Transactions of the philological society* 113: 137–176.
- Ringe, Don (2006) *A linguistic history of English*, vol. 1: *From Proto-Indo-European to Proto-Germanic*. Oxford, New York: Oxford University Press.
- Ringe, Don (2011) Review: Tanaka, Toshiya. *A morphological conflation approach to the historical development of preterite-present verbs: Old English, Proto-Germanic, and Proto-Indo-European*. Fukuoka: Hana-Shoin. Xiv + 320 pp. *The journal of Indo-European studies* 39: 503–507.
- Ringe, Don and Ann Taylor (2014) *A linguistic history of English*, vol. 2: *The development of Old English*. Oxford, New York: Oxford University Press.
- Rix, Helmut (1976) *Historische Grammatik des Griechischen: Laut- und Formenlehre*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft. [2nd edition 1992]
- Schaffner, Stefan (2001) *Das Vernerische Gesetz und der innerparadigmatische grammatische Wechsel des Urgermanischen im Nominalbereich*. Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck.
- Schmidt, Klaus T. (1997) Zu einigen Archaismen unter den tocharischen Präteritalbildungen. *Tocharian and Indo-European studies* 7: 255–261.
- Schumacher, Stefan (1998) Eine alte Crux, eine neue Hypothese: gotisch *iddja*, altenglisch *ēode*. *Die Sprache* 40: 179–201.
- Schumacher, Stefan (2005) ‘Langvokalische Perfekta’ in indogermanischen Einzelsprachen und ihr grundsprachlicher Hintergrund. In: Meiser, Gerhard and Hacksten, Olav (eds.) *Sprachkontakt und Sprachwandel. Akten der XI. Fachtagung der indogermanischen Gesellschaft, 17.–23. September, Halle an der Saale, 591–626*. Wiesbaden: Reichert.
- Seebold, Elmar (1966) Die ae. schwundstufigen Präsentien (Aoristpräsentien) der *ei*-Reihe. *Anglia* 84: 1–26.
- Seebold, Elmar (comp.) (1970) *Vergleichendes und etymologisches Wörterbuch der germanischen starken Verben*. The Hague: Mouton.
- Seebold, Elmar (comp.) (2008) *Chronologisches Wörterbuch des deutschen Wortschatzes* Vol. 2: *Der Wortschatz des 9. Jahrhunderts*. Berlin, New York: de Gruyter.
- Sihler, Andrew L. (1995) *New comparative grammar of Greek and Latin*. New York: Oxford University Press.
- Steinmeyer, Elias and Eduard Sievers (eds.) (1879) *Die althochdeutschen Glossen*, Volume 1. Berlin: Weidmannsche.
- Streitberg, Wilhelm (1896) *Urgermanische Grammatik*. Heiderberg: Winter.
- Svensson, Miguel Villanueva (2012–2013) On the origin of the Greek type *voμάto*. *Die Sprache* 50: 44–62.
- Szemerényi, Oswald J. L. (1996) *Introduction to Indo-European linguistics*. Oxford: Oxford University Press.
- Tanaka, Toshiya (2006) Old English *æt* ‘ate’ and the preterite plural formation of the strong class V verbs. *Eigo-eibungaku ronsō* [*Studies in English language and literature*, Kyushu University] 56: 13–22.
- Tanaka, Toshiya (2009) The Proto-Germanic third person plural strong preterite and the Proto-Indo-European ‘type I’ thematic present formations: With special reference to the strong IV and V classes. *Gengo kagaku* [*Linguistic science*, Kyushu University] 44: 1–23.
- Tanaka, Toshiya (2010) Osthoff’s law and the rise of the strong I–III preterite formations in Proto-Germanic. *Gengo bunka ronkyū* [*Studies in languages and cultures*, Kyushu University] 25: 7–21.
- Tanaka, Toshiya (2011) *A morphological conflation approach to the historical development of preterite-present verbs: Old English, Proto-Germanic, and Proto-Indo-European*. The faculty of languages and cultures library II. Fukuoka: Hana Shoin.
- 田中俊也 (2013a) 「ゲルマン語強変化動詞 IV, V 類の過去複数形をめぐる考察」『英語英文学

論叢』(九州大学英語英文学研究会) 63: 67-112.

田中俊也 (2013b) 「ゲルマン語強変化動詞 V 類過去複数形に散発的に見られる語根末摩擦音の有声化について: *wes- ‘be, stay, dwell’ の事例を中心に」『歴史言語学』(日本歴史言語学会) 2: 3-20.

Tanaka, Toshiya (2015) Remarks on two morphophonological differences between strong and preterite-present verbs in Germanic. *Eigo-eibungaku ronsō* [*Studies in English language and literature*, Kyushu University] 65: 17-29.

Weiss, Michael (2009) *Outline of the historical and comparative grammar of Latin*. Ann Arbor: Beech Stave.

電子コーパス

Kali-Korpus, Leibniz Universität Hannover, <http://www.kali.uni-hannover.de>.

執筆者連絡先:

[受領日 2014年3月3日

〒819-0395

最終原稿受理日 2017年8月16日]

福岡市西区元岡 744 番地

九州大学 大学院言語文化研究院

e-mail: tanaka.toshiya.240@m.kyushu-u.ac.jp

Abstract

On Morphological Differences between Class IV and V Strong and Preterite-present Verbs in Germanic: A Critical Examination of Schumacher's (2005) Treatise and a New Proposal Based on Morphological Conflation

TOSHIYA TANAKA

Kyushu University

Indo-Europeanists have so far widely accepted the idea that both the preterite tense formations of strong verbs and the present tense forms of preterite-present verbs developed out of the PIE perfect. However, class IV and V strong verbs show a long vowel in their root (e.g. *bǣr- or *bē'r- ‘carried’, *lās/z- or *lē's/z- ‘collected’), whereas corresponding preterite-presents reflect the original reduced grade vocalism in their root (e.g. *mun- ‘think’, *nug- ‘are sufficient’). The traditional view that the PIE perfect underlies all these formations has yet to provide any satisfactory historical explanation for the conspicuous morphological difference observable between these two formation types. Although Schumacher (2005) offers a new proposal about the relevant problem in accordance with the time-honoured view, this paper points out that his ‘bigētun-Regel’ cannot adequately account for the morphological divergence at issue. Instead of the conventional interpretation of both the strong preterite and the preterite-present present tense forms having evolved from the PIE perfect alone, the current paper attempts to present a different formula, which may be called a ‘morphological conflation’ theory. This approach proposes that the preterite tense formations of strong verbs result from a mixing of the perfect and the imperfect, whilst the present tense forms of preterite-present verbs stem from an amalgamation of the perfect and the athematic present middle. It is contended that the difference in morphological conflation style has yielded the remarkable morphological differences between the two kinds of verbs under discussion.